



始







| | | |
|-------------|----------------------------|----------------|
| <p>明庵主編</p> | <p>室內 解放 公案解答集</p> | <p>中央佛敎社發行</p> |
|-------------|----------------------------|----------------|

大正
14. 4. 24
內交

序

庵主不肖なりと雖、達磨嫡傳の宗旨に參得し自ら信じて疑はざる底のものあり。翻つて方今の所謂禪と稱するものを見るに庵主が信ずる底のものと遠して遠し、其の多くは野狐相似の邪禪にして邪師邪説を逞うして正傳の正法を蠱毒し、眞實求道の善男善女を惑了し、清淨の法施を領得して、邪命を相續する不淨の粥飯となす、豈に慨歎に堪へざらんや。

庵主竊に之を案ずるに往昔大慧宗果一度看話の禪を唱ふるや其の門風益盛なるに隨つて其の弊風亦隨つて甚だしく、所謂梯子の

禪となり、待悟の禪となり、我が國に來つて白隱出づるに及んで一種の模型を案出し、下つて隱山卓州に至るや、其の模型は益復雜を極め以て今日に至れり。現今我國に於て師家の金看板を掲げ、老師と敬はれ、老漢と稱せられ、多くの學人を接得して得々たる者あり。其の多くは嫡傳の正法に於て警地の智通すら猶ほ且つ夢にだも見る能はざる無智低能の癡漢にして、龍蛇を辨別するの力量なく、學人の境地如何を見るの眼光なく、父祖の糟糞たる模型に合せずんば「それでよいかも知れぬが、古人はさうは云つて居られぬ」の一語の下に通過せしむること無し。これ彼等自ら自己の無能無力を暴露するものに非ずして何ぞや。

彼等が學人を接するを見るに皆密室内に於てし、其の問答商量の一語一句より一舉一動に至るまで、絶對の秘密に附せざるは無し。これ手品師が手品の種を知らしめざると同一般にして、彼等が鉢孟の空虚とならんことを恐るればなり。借問す、大唐國裡の大宗師にして能く斯くの如き手段を弄せし者ありや。

彼等の多くは破戒無慙の比丘にして道心なく徳操なく、其の言行野卑陋劣、往々見るに忍びざる狂態を演出するものあり、これ即ち邪法を説き邪禪を勧め以て己が衣鉢の料を得んとする邪師の徒なればなり。古聖言はずや、正師に逢はずんば學ばざるに如かずと。宜なる哉、彼等が會下に集るもの幾多の年月と幾多の資財を空

費するのみならず、同穴の野狐と化し終に手に終へざる代物を頻出す。亦以て今日の公案禪に何等の價值なく、何等の權威なきのみならず、其の害毒の及ばす所誠に尠からざることを證するに足る。

庵主本書を編する所以のものは參禪者各其の有害無益なることを知ると共に、彼等をして省みる所あらしめ、速に正傳の正法に入らしむる一の權方便としての老婆心に外ならざる也。

本書は嘗て瞎驢庵主が編したる公案四百則を取捨してこれが解答を附し、猶ほ其の足らざる所を補ひたるものにして、現今行はるる公案の大體を盡せるものと謂つて可也。

大正十一年二月佛涅槃の日

明眼庵主識

理屈上は是をたしと云ふても、こゝに於ては、人々ももつては、ふいふ、
こゝに於ては、著す人の、言ひかゝるゝた、いふ、
全くだ。

目次

| | | |
|---|---------|----|
| 無 | 字 | 一 |
| 隻 | 手 | 一六 |
| 機 | 關 | 二六 |
| 法 | 身 | 三三 |
| 言 | 證 | 三七 |
| 道 | 歌 | 三三 |
| 神 | 道 | 三三 |
| 經 | 文 | 三三 |
| 古 | 則 | 三三 |
| | 一、黃龍三關 | 三三 |
| | 二、兜率三關 | 三三 |
| | 三、臨濟三句 | 三三 |
| | 四、臨濟四料簡 | 三三 |
| | 五、聖諦第一義 | 三三 |
| | 六、百丈野狐 | 三三 |
| | 七、維摩入不二 | 三三 |
| | 八、無位真人 | 三三 |

目次

目次

九、趙州布衫.....七
 一〇、華嚴法界.....七
 一一、無縫塔.....八
 一二、臨濟孤峯.....八
 一三、不入涅槃.....八
 一四、庭前の柏樹子.....八
 一五、智門般若體.....八
 一六、南泉斬猫.....八
 一七、趙州戴草鞋.....八
 一八、六祖衣鉢.....八
 一九、雲巖大悲手眼.....九
 二〇、俱胝一指.....九
 二一、離却語言.....九
 二二、倩女離魂.....九
 二三、佛性三轉語.....九
 二四、香嚴樹上.....九
 二五、乾峰一路.....九
 二六、婆子燒庵.....九
 二七、靈雲見桃.....九
 二八、關山賊機.....九
 二九、智不到處.....九
 三〇、洞山麻三斤.....十

三一、趙州勘婆.....一〇
 三二、古帆未掛.....一〇
 三三、至道無難.....一〇
 三四、州勘庵主.....一〇
 三五、黃檗嗜酒糟漢.....一〇
 三六、智門蓮華荷葉.....一〇
 三七、陸互天地同根.....一〇
 三八、首山竹篋.....一〇
 三九、體露金風.....一一
 四〇、佛早留心.....一一
 四一、雲門花藥欄.....一一
 四二、南泉遷化.....一一
 四三、大隋劫火洞然.....一一
 四四、風穴祖師心印.....一一
 四五、翠巖眉毛.....一一
 四六、許老胡知.....一一
 四七、雲門對一說.....一一
 四八、雲門倒一說.....一一
 四九、金牛飯桶.....一一
 五〇、藥山看箭.....一一
 五一、牛過窓橋.....一一
 五二、天皇恁麼.....一二

目次

| | |
|-----------|-----|
| 五三、女子出定 | 一三二 |
| 五四、千尺井中 | 一三二 |
| 五五、夾山掘坑 | 一三三 |
| 五六、大龍堅固法身 | 一三三 |
| 五七、玄沙三種病人 | 一三三 |
| 五八、鹽官犀牛扇子 | 一三三 |
| 五九、乾峯三種病 | 一三三 |
| 六〇、德山托鉢 | 一三三 |
| 五位 | 一三〇 |
| 十重禁 | 一三二 |
| 一、快意殺生成戒 | 一三二 |
| 二、劫盜人物戒 | 一三二 |
| 三、無惡行欲戒 | 一三二 |
| 四、故心妄語戒 | 一三二 |
| 五、酩酒生罪戒 | 一三二 |
| 六、談他過失戒 | 一三二 |
| 七、自讚毀他戒 | 一三二 |
| 八、慳生毀辱戒 | 一三二 |
| 九、瞋不受謝戒 | 一三二 |
| 一〇、毀謗三寶戒 | 一三二 |
| 末後牢關 | 一三二 |

室内
開放
公案
解答集



無
字

明眼庵主編

趙州和尚に、
狗子に佛性ありや也た無しやと問ふたら、無

答 力を込めて「むー」と叫ぶ。

二 證據を出して見よ。

無
字

答 同じく「むー」と叫ぶ。

三 生死透脱はどうぢや。

答 同じく「むー」と叫ぶ。

四 焼けば灰となり埋めば土となつた後どう見たか。

答 同じく「むー」と叫ぶ。

五 無と言はずして何んと言ふぞ。

答 同じく「うー」と叫ぶ。

六 無と有と判然區別せよ。

答 同じく「むー」「うー」と叫ぶ。

七 無と有と相去ること多少ぞ。

答 此處から敷居まで約幾尺、此方の障子まで約幾尺ありますと云ふ。

八 無は何處まで透る。

答 起出して、一手を以て天を指し「上は三十三天より」と云ひ、足踏みして、一手を以て地を指し「下は金輪那落の底迄透つてゐます」と答ふ。

九 無字を手渡しして見よ。

答 何物にてもよし、品物を直に出して渡す。

一〇 無字を賽の目に切つて獻立を試してみよ。

答 「奴豆腐を召上れ」と云つて勧める眞似す。

二 無字を手軽く使つて見よ。

答 チヤンケンポイの眞似す。

又は、ひい、ふう、みい、よ、いつ、む、なな、や、ここの、
とを、と指を曲げて十迄數へる。

三 無字を細末にし絹篩にかけて手渡して見よ。

答 「蕎麥粉を召上れ」と云つて勤める眞似す。

三 無字の高さを云つて見よ。

答 自分の身の丈けを「何尺何寸」といふ。

四 無字の姿は什麼ぢや。

答 又手當胸して起立する。

一五 無字の裏の姿は什麼ぢや。

答 又手當胸して後向きになる。

一六 無字を七步周行させて見よ。

答 室内を一周する。

一七 無字に對する寸法は何尺何寸あるか云つて見よ。

答 自分の著物の寸法を、「丈け何尺何寸、衿何寸何分、袖丈け
何寸何分」と云ふ。

一八 無字の先照後用を此の品（そこに有り合せの品を示して）に
てやつて見よ。

答 若し扇子ならば手に取つて眺めながら、「實に結構な扇子で

無
字

骨は竹、表は何の繪で、裏は何で」ご評したる後、扇いで見る。

一九 無字を二歳の兒童にでも解るやうに言ひ分けて見よ。

答 子供をあやす眞似す。

二〇 無字を見て何にする。

答 「朝起きてから、顔を洗ひ、掃除をし、朝食を食つて」と日常にやることを述ぶ。

又は「主人になり、下女になり、大工になり、左官になり」と社會百般の職業の眞似す。

二一 無字を見たら無底の椀子に無心の心を盛り持ち來れ。

答 兩手を展げて「無底の椀子」と云ひ、兩手にて物を模する眞似して「無心の心」と云ひ、更に椀を捧げる眞似して「盛り持ち來れ」と云ふ。

二二 無字を脱洒自在に使つて見よ。

答 大工、左官、魚屋等社會百般の職業の眞似す。

又は起つ、坐る、寝る、歩む等自由自在の働きの様子をす。

二三 無字を日用の上に用ゆる賣品を以て有と無とに言ひ分けて見よ。

答 此の銘仙一反なら何圓、半反なら何圓と云ふ。

二四 これに世語を著けて見よ。

答 千なりもつるひとすぢの心から。

二五 これに本語を著けて見よ。

答 一樹春風有兩般。南枝向暖北枝寒。

二六 無字を摘んで出して見よ。

答 其處に有り合せのものを何物にてもかまはず摘んで差し出す。

二七 大惠曰く、趙州の無字祇麼に舉せよ。

答 「むー」と叫ぶ。

二八 古人曰く、此の僧未だ佛性を問はず、趙州無と答へざる時如何ん。

答 「むー」と叫ぶ。

二九 頌に曰く、(一) 趙州の狗子無佛性、(二) 萬疊の青山古鏡に藏る、

(三) 赤脚の波斯大唐に入る、(四) 八臂の那叱正令を行す。

答 (一) 趙州の狗子無佛性云々と誦し出す。

又「むー」と叫ぶ。

(二) 四方を見廻しつゝ、此の句を唱へ乍ら自己の懷中を眺めて止む。

(三) 萬里遠來の客が非常に疲れし様子をして、杖をつきつゝ、「あゝ痛たく」と云ひ乍ら徐々として歩行す。

(四) 其の野郎命令に服せぬかといつて師家の背中を打つ。

又「シツ」と叫んで師家に斬り付くる眞似す。
又先づ「むー」と叫び、師家の頸を打つ。師家注して曰く、
「此を腦後の一鎚と稱す」と。

三 中峯和尚八箇の無字は什麼ぢや。

答 飯を食ふも「むー」茶を喫するも「むー」寝るも「むー」起きるも「むー」等と八箇の動作を舉げて八箇の「むー」を唱ふ。
又師家が「よし」と云ふまで、種々の動作をなして「むー」と唱ふ。

三 無門大師二十箇の無字は什麼ぢや。

答 何にてもよし、五言四句の如き二十字の偈頌を讀む。

三 それを小兒にも分るやうに云つて見よ。

答 アイウエオ、カキクケコと五十音を二十字讀む。

三 頌に曰く、趙州の露双劍、寒霜光焰々、纔に如何と擬著せば、
身を分つて兩段となす。

答 刀を抜き構へたる様子をして少し振はしながら「ピカ／＼カチ／＼」と云ふ。

三 無字の根底は什麼ぢや。

答 盡大地風ちつとも吹かず、土ひとなめも無い所から、天と現れ、地と現れ、山と現れ、川と現れる。

又は、天も無く、地も無く、山も無く、川も無く、草木叢

無字

二

林悉く無く、我も無く、人も無く、斯く言ふ語も亦無し。
或は又、「そんなものがあつて堪るものか、顔でも洗つて來
い、アカンペイ」と云ひ、座を起ち去り襖を閉むる。

三三 これに語を著けて見よ。

答 聽雨寒更盡、開門落葉多。

又、梅枯終見底、人死不知心。

三六 無字の業識性は什麼ぢや。

答 「むー」と叫ぶ。

又は、重々しく「業識性」と云ふ。

三七 業識性を平語ひらたく云つて見よ。

答 憎い、可愛い、憐い、欲い。

三八 業識性を二分して見よ。

答 「うー」「むー」と叫ぶ。

三九 趙州或時は曰く、有と、これは什麼ぢや。

答 「たとひ趙州は有と云ふとも某申は只管にむー」と叫ぶ。

又は、「うー」と叫ぶ。

四〇 有を平語ひらたく云つて見よ。

答 男でもない者を男ぢや〜と思ひ、女でもない者を女ぢや
女ぢやと思ひ、山でも川でも花でもないものを山ぢや川ぢ
や花ぢやと思ふて居るのが有であります。

四 有無の別は什麼ぢや。

答 和尚が有なれば私は無。

四 有無の隔りは什麼ぢや。

答 敷居が有なれば柱が無、天井が無なれば疊が有。

四 我が家は教外別傳不立文字と云ふが、文字を立せぬ端的はど
うぢや。

答 敷居は横であります。

四 然らば文字を立する端的はどうぢや。

答 柱は豎であります。

四 無字の體はどうぢや。

答 又手當胸して起立す。

四 無字の用はどうぢや。

答 立ち上りて大手を振りて五六歩行き「行かんこ要せば行
き」と云ひ、再び坐して「坐せん」と要せば坐す」と云ふ。

四 師云く、知つて故らに犯すと、これはどうぢや。

答 生死巖頭大自在を得、六道四生に向つて遊戯三昧なるが故
に、猫にならうと犬にならうと自由勝手であります。

又は、炭團は白く、雪は黒し。

四 無字に對する總語を著けて見よ。

答 雲遮劍閣二千里、水隔瞿塘十二峰。

隻手

一 白隠和尚曰く、「兩手相拍つて聲あり、隻手何の音聲ぞ」と、隻手の聲をどう聞いた。

答 隻手をニユツト突き出す。

二 隻手を聞いたたら證據を出せ。

答 同じく隻手を突き出す。

三 隻手を聞いたたら、生死透脱はどうぢや。

答 同じく隻手を突き出す。

四 焼けば灰、埋めば土となつた後の隻手はどうぢや。

答 同じく隻手を突き出す。

五 隻手を打ち切つてしまつたらどうぢや。

答 斬つても斬れぬ。

又は、「斬れるなら斬つて御覽なさい」と隻手を突き出す。
或は黙して隻手を突き出す。

六 何故斬れぬか。

答 宇宙に充ち満ちて居るから。

七 宇宙に充ち満ちたるものを持つて來い。

答 隻手を突き出す。

八 隻手精神の存在はどうぢや。

答 上は三十三天より下は金輪那落のドン底迄充ち満ちて居ります。

九 隻手の姿を見て来い。

答 又手当胸して起立す。

一〇 隻手を焼けばどうぢや。

答 焼いても焼けぬ。

二 父母未生以前の隻手は何ぢや。

答 隻手を突き出す。

三 隻手の音聲を京で聞いたか播磨で聞いたか。

答 京では祇園、圓山、金閣寺、播磨では須磨、舞子、明石。

三 隻手の音聲を裏で聞いたか表で聞いたか。

答 手を出し反覆して、「裏表自由自在」と云ふ。

又は「裏でカア〜表でチュー〜」と云ふ。

又は「裏でも表でも聞いた、上十五日は表で聞いた、

下十五日は裏で聞いた」と云ふ。

二四 十五日以前の隻手、十五日以後の隻手、正當十五日の隻手は何ぢや。

答 右の手を出して、「十五日以前の隻手」左の手を出して、「十五日以後の隻手」といひ、更に兩手を合せて、「正當十五日の隻手」といふ。

一五 隻手を聞いて畢竟何にする。

答 草取もし、雑巾掛もし、お疲れなら按摩も致します。

一六 そんなら私にも聞かせて呉れ。

答 師家の横顔に一掌を與へる。

一七 富士山頂上の隻手は何ぞや。

答 手をかざし山頂より下を見下す様子をして、「ああ住い景色だ」と云つて眼界の光景を述ぶる。

一八 富士山上の隻手に語を著けて見よ。

答 浮雲連海岱平野入青徐。

又は、到江吳地盡、隔岸越山多。

一九 隻手を粉にして呑んで見よ。

答 唐辛は粉にしてたべ、饅飩蕎麥は粉で造つてたべます。

二〇 隻手を焼いて灰にして一と握りにして來い。

答 「そんな馬鹿なことが出来るか」と、師家に一掌を與ふ。

二一 隻手向上の一句は何ぞや。

答 「豆腐く、納豆く」と物賣りの真似す。

二二 盡大地盡乾坤一個の隻手は何ぞや。

答 力を込めて、隻手を突き出す。

二三 隻手微妙の音聲は何ぞや。

答 其の時に耳に聞ゆるところの音を直ちに真似する。

二四 隻手無聲の音聲は什麼ぢや。

答 たゞ黙して起立し、更に又坐して禮拜す。

二五 隻手は何處迄届くか。

答 「此處迄届く」と手を疊の上に差し出す。

二六 隻手眞の境界は什麼ぢや。

答 夢幻空華と觀じます。

二七 隻手の根源は什麼ぢや。

答 「そんなものがあつて堪るものか、アカンベー」と云つて、
アカンベーをして出て行く様子をする。

又は、「盡大地風ちつとも吹かぬ、土一嘗めもない。」

又は、「兔の毛一本も無い處から隻手を打たせた。」

二八 隻手總體に語を著けよ。

答 秋天曠野行人絶、馬首東來知是誰。

機關

一 虚空を荒繩で縛つて持つて來い。

答 何物にてもよし、座邊の品物を縛つて差し出す様子をする。

二 今食時だから虚空をあえ物にして持つて來い。

答 「大根葉の味噌あえ召し上れ」を勧むる様子をする。

三 虚空を細末にして馳走せよ。

答 蕎麥粉其の他の粉類を勧むる様子をする。

四 此の廣い世界に雨が幾粒降つてゐるか。

答 外に向つて一粒、二粒、三粒、四粒と數へる。

五 庭の木の葉は何枚あるか數へてみよ。

答 庭を向いて、「一枚、二枚、三枚、四枚」と數へる。

六 天の星の數は幾個あるか。

答 天を向いて、「一つ、二つ、三つ」と數へる。

又は、「五つ、六つもありませうか、それとも十二三もありませうか」と何氣なく答へる。

七 四十九曲り細山道を直ぐに通らにや一分たたぬとあるが、どう通ればよいか。

答 室内を曲折歩行して、細山道を行く様子をする。

八 一切衆生悉く佛性あり鴉何に依つてが佛頂を汚す。

答 「鴉めが人の頭に糞を垂れやがつて」と云つて、自分の頭を拂ふ。

九 一切衆生は肉骨を藏す、龜何に依つてか骨肉を隠す。

答 手脚を縮めて龜の様子をなし首を伸したり縮めたりする。

一〇 富士山を燈心で縛つて持つて来い。

答 「破れ手巾でも締めてそろそろ出掛けようかい」と出掛ける様子をする。

又は、「縛れる物かい、縛れるなら縛つて御覽なさい」と力味返る。

二 富士山を三足歩ませて見よ。

答 起つて三足歩む。

三 淺草の觀音様の御堂を普請するには何處から手斧を初めたか。

答 起ち上りて、カチン／＼と手斧を使ふ様子をする。

三 千里遠方の燈火を消して見よ。

答 「お離れの燈は誰も居らず、危くもあり、無益でもありませんから、消して來ませう」と云つて、ブツと吹き消す様子をする。

又は、手先きにて燈火の上る形をなしつつ口にてスツ／＼といふ。

一四 此の煙管の中を出入りして見よ。

答 横臥して一直線となり、首を曲げて雁首に擬し、煙管の態をなす。

一五 一昨日吸ふた煙草の吹殻を持つて来い。

答 全身を圓形にし吹殻の模様をなす。

一六 此の柱の中へ入つて見よ。

答 柱へドンと突き當る。

一七 これに世語を著けて見よ。

答 離れて見やがれ唯おくものか藁の人形に五寸釘。

一八 此の徳利の中に入入りして見よ。

答 手に徳利を持つ様子をして、一杯お酌しませう。

一九 おれの頭の髪の毛は何本あるか。

答 師家の頭の毛を一本二本と數へる。

二〇 沖に走る帆掛け船をとめて見よ。

答 起立し、兩袖を開いて、帆掛船の走る様子をする。

二一 櫓を漕ぐ船を止めて見よ。

答 起立し、ギーコくと櫓を漕ぐ様子をする。

二二 川向ふの喧嘩を止めて見よ。

答 「何んだ此の馬鹿野郎、ドテツバラ蹴破つて小便蹴込んでやるぞ」と云ふやうなことを云ひ乍ら、師家の胸倉を取つて喧

嘩をする様子をする。

二三 此茶碗の中で行道して見よ。

答 又手當胸して室内を巡り、行道の様子をする

二四 善く射る者は的に中らずと云ふが、これは什麼ぢや。

答 弓を滿に引き矢を放つ様子をして、「アツ」と叫ぶ。

二五 西方十万億土の阿彌陀如來は本年幾歳になるか。

答 我と同年。

二六 天の高さは何程あるか。

答 天井を指して、「これから幾尺あります」と天井の高さを云ふ。

二七 風何の色をか成す。

答 自分の著てゐる著物の色合を上は何下は何と云ふ。

二八 これに世語を著けて見よ。

答 乙女子が春の野に出でわかなつむ谷のあらしにもすすそ亂る。

二九 これに語を著けて見よ。

答 紅粉青娥映楚雲 桃花馬上石榴裙。

三〇 風の體は什麼ぢや。

答 兩手を突き出して「スーツ」と云ひ乍ら風の過ぐ様子をする。

三一 風の用は什麼ぢや。

答 「今迄は北風でしたが、どうやら南風に變りさうです」と、風

向の有様を述ぶる。

三 雨何れよりか来る。

答 両手の指で師家の頭の上に雨の降り掛る様子をすする。

又は、「バラ／＼」と雨音の眞似をする。

三 これに語をつけて見よ。

答 南山起雲 北山降雨。

三 石の櫃へ入れられて外から錠を下されたらどうして出るか。

答 「オーイ、誰れか来て呉れい」と云ひつつ、櫃を叩く様子をすする。

三 此の扇子は天から降つたか地から湧いたか。

答 これは何處其處で幾らで買つて來ました。

三 夜著の袖口から東京を見て來い。

答 袖を窺き込みて、「禪の紐が見えます、襦袢の風がゴソ／＼して居ます」と云ふ。

三 家鴨の卵の中で茶臼を廻して見よ。

答 室内を圓形に廻り歩く。

三 八疊の間に化け物が大の字なりに寝てゐるが、床の間の軸物を什麼して取りに行くか。

答 「御免下さい」と云つて襖を開き、「お休み中にお邪魔致しますが」と云ひつつ、軸物を取る様子をし、もとの處へかへつて、

「誠に難有う御座いました」と云ふ。

三 隠元茶釜の中から東寺の塔を出して見よ。

答 ツット直立する。

四 印籠の中から富士山を出して見よ。

答 お腹が痛ければ萬金丹を上げませう。

四 印籠の第二重目から白山を出して見よ。

答 清心丹を上げませう。

四 天台の石橋何處より著手するか。

答 師家の手を取り立ち上りて、木遣を謠ひながら、エンヤラヤア〜と引きずり廻す。

四 文殊獅子に乗り普賢象王に乗る、釋迦如來は何に乗りたまふか。

答 座蒲團を敷きませう。

又は、破れ座蒲團の上にドンすわつて居ました。

四 大修行底の人ならば口を覆うて一句を道つて見よ。

答 「道へるか、道へぬか、先づ和尚から道つて見よ」と云ひつつ師家の口を塞ぐ。

四 新出來の佛を何處に安置したら可いか云うて見よ。

答 「サアどうか薄團をお敷き下さい」と云つて來客を接待する様子をする。

四六 此の竹篋の中へ出入りしてみよ。

答 竹篋を懷中に收める。

四七 生きた達磨の舍利を分身させてみよ。

答 耳糞を取りて差出す様子をする。

四八 大小の河水悉く東海に歸すといふが、隅田川の水は何處に流歸するか。

答 起ち上りて放尿する様子をする。

四九 八大龍王の中で雨を降らす龍王は何の龍王であるか。

答 師家の前の向つて放尿の様子をする。

五〇 春日の局が幽靈を濟度する時は茶碗の中に水を一杯入れて自

ら簪を抜いて茶碗の上に横へて濟度せりと、大修行底の人如何が濟度せん。

答 幽靈の様子をして、「怨めしやなく」と云ふ。

五一 汝は何處より生れて來て何處に歸るか。

答 「只今何處から來まして何處へ歸ります」と云ふ。

五二 無寒暑の處を云うてみよ。

答 力を込めて、寒い、暑いと叫ぶ。

五三 此の香爐の中に隠れて見よ。

答 香を拈じて焼香する様子をする。

五四 死んで了つたら何處に向つて行くか。

答 一寸はばかりへ行つてまゐります。

五 三千の諸佛即今如何なる説法をしてをるか。

答 雀はチュ〜、鳥はカア〜、猫はニヤン〜、犬はワ
ン〜。

六 大黒柱は如何なる説法をなしつつあるや。

答 師家は朝早くから弟子の世話をし、在家では親爺は朝早く
から家内中の世話をしてゐます。

七 獅子領下の金鈴子何人か奪ひ得たる。

答 「御免下され」と云ひながら、師家の絡子を取り外す。

八 文福茶釜の中より七福神を出して見よ。

答 お渴きになりますなら、お茶を差上げませう。

九 糞壺の中の光明は如何。

答 「ア、臭い〜」と云つて鼻をつまむ。

一〇 奈良の大佛を此處に背負つて來い。

答 「サア、おんぶする〜」と云ひながら、師家を背負ふ眞似
をする。

一一 紫古の門札に曰く、上は首を取り中は腰を取り下は足を取る
擬議せば喪身失命すとあり、大修行底の者一句作麼生。

答 相撲を取る様子をする。

一二 一人の小僧瓦を大石の上に載せて、一句作麼生といふ時何ん

三 答へるか。

答 「何をぬかすか」と、師家の膝頭を蹴る。

三 汝の鼻孔中の毛は幾本あるか。

答 師家の鼻の吼を指して一本二本と數へる。

六 豆腐の上で四肢を踏んで見よ。

答 「土俵の上で」と云ひながら四股を踏む。

五 夢中の西來意は什麼ぢや。

答 大鼾をかき熟睡の眞似す。

六 汝に烈火の饑別せん速に受け取れ。

答 「これへ下さい」と云ひながら衣の袖を出す。

七 大燈國師は雲門の再來と云ふが、それ迄何處に何うしてゐたか。

答 自分が生れてたら今日迄の略歴を述べる。

法身

一 空手に鋤頭を把り。

答 鋤を取りて耕作する様子をする。

二 歩行して水牛に騎る。

答 裾をかかげて水を渡る様子をする。

又は、師家の背に跨り「ハイ〜ドウ〜」と尻を打つ。

三 人橋上より過ぐれば。

答 又手當胸して、「カラン〜」と云ひながら、橋を渡る様子をする。

四 橋は流れて水は流れず。

答 身を曲げ疊に手をつき橋のやうになり、そして後、身を轉回して流水の様子をする。

五 五臺山上雲飯を蒸す。

答 典座寮では齋座の用意をして居ます。

六 古佛堂前狗天に尿す。

答 犬が電信柱へ小便をしかけた。

七 刹竿頭上に鎚子を煎る。

答 貼案寮では芋や大根を煮てゐる。

八 三箇糊糝夜錢を斲す。

答 大道の真中で子供か錢廻しの賭け事をして居る。

九 徐ろに行て踏断す流水の聲。

答 裾をからげて川を渡る様子をする。

一〇 縦に觀て寫し出す飛禽の跡。

答 飛禽が餌を拾ふ様子をする。

一一 荷葉團々として鏡よりも圓なりを、自利の方から見ればどう
ぢや。

答 自分の頭を撫て廻して、コンナに圓いのです。

三 然らば利他の方はどうぢや。

答 權兵衛も八兵衛もお鍋も泥塗れになつて働いてゐます。

三 菱角尖々として錐よりも尖しを、自利の上から見ればどうぢ
や。

答 「錐よりも尖し」と云ひながら、組合せたる兩手を急激に離
す。

四 然らば利他の方はどうぢや。

答 商人は算盤パチ／＼と利益を争つてゐます。

五 風柳絮を吹いて毛毬走り。

答 風吹けば柳の花が飛ぶ。

六 之に本語を著けよ。

答 雞寒上木。

一七 雨梨花を打てば蛺蝶飛ぶ。

答 雨降れば梨の花が飛ぶ。

一八 之に本語を著けよ。

答 鴨寒下水。

一九 昨夜泥牛戦つて海に入り未だ今朝に至るまで消息を得ず。

答 向ふ通るは清十郎ぢやないか、笠がようにた菅笠が。

言 詮

一 空を鼓けば響あり木を打てば聲なし。

答 「空を鼓けば響あり」と云ひつつ空を敲き、「木を打てば聲なし」と云ひつつ疊を打つ。

二 政女あり白隠禪師に問うて曰く、夢中に一人あり若し西來意を問はゞ如何んが答へ得ん。

答 鼾を立てて熟睡の眞似す。

三 これに世語を著けて見よ。

答 世の中は寝るより樂はなかりけり浮世の馬鹿は起きてはた

らく。

四 これに本語を著けて見よ。

答 睡美不知山雨過。覺來殿閣自生涼。

五 了徹居士あり、惠昌尼問うて曰く、尼老いたり自ら起つ能はず、請ふ手を下さずして尼を起たしめよ。

答 「ヤツコラサ」と老尼の起きる様子をして起き上る。

六 拶して曰く、私を手を出さずして起して見よ。

答 起つて二三歩歩行する。

七 桃首座あり、葦津に問うて曰く、大力の鬼あり、汝が臂を捉へて大熱地獄に投ずる時作麼生。

答 「熱い〜熱い」と云ひながら、中火に入りて苦む様子をする。

八 君子は財を愛す之を取るに道あり。

答 頂けるものならドンナ物でも頂きます。

九 微風幽松を吹く、近く聽けば聲愈好し。

答 手を耳の邊りに當て、サー〜と云ひ、松風を聞く様子をする。

一〇 拶して云く、近く聽く底作麼生。

答 「此れは内密の話一寸お耳を御貸し下さい」と云つて内密話をする様子をする。

二 懷州の牛禾を喫すれば益州の馬腹を張る。

答 あなたさへおあがりになれば私は食べなくても澤山です。
三 長公酒を喫すれば李公酔ふ。

答 一一と同じ。

三 木鶏子夜に鳴き。

答 コツケツコーと鶏の眞似す。

四 芻狗天明に吠ゆ。

答 「ワン／＼」と狗の眞似す。

五 朝には西天に到り暮には東土に歸る。

答 「朝には西天に到り暮には東土に歸る」と云ひながら室内を
歩行する。

二六 毛頭巨海を呑み芥中に須彌を納る。

答 お茶一杯に煎餅一枚。

二七 雲は嶺頭に到つて閑不徹。

答 「ビール正宗サイダー、馬關名産龜の子煎餅」と如何にも騒が
しいステーションの様子をする。

二八 水は澗下に流れて大忙生。

答 いそがしそうな歌でも何か歌つて躍り廻る。

道歌

一 千の利休曰く、寒熱の地獄に通ふ茶柄杓も心無ければ苦しきもなしと、茶道の人大に貴ぶと雖心無ければ木石に等し大修行底の人下の句を改め來れ。

答 心無ければごぼごぼ。

二 燈火の消えて何處にゆくやらむ闇きは元の住家なりけりと古歌にあれども下の句未だ穩かならず改め將ち來れ。

答 その柱で頭ゴツリ。

又は、西瓜の皮にツルリ滑つた。

三 伊勢の海千尋の底の一つ石袖ねらさず取るよしもがな、サア取つて見よ。

答 海に飛込み大石を持ち揚る様子をなす。

四 拶して曰く、其の石の銘は何と切つてある。

答 「某誰こ」自分の名を云ふ。

五 拶して曰く、其の石の目方は何程ある。

答 「十幾貫何百目」と自分の體の重さを云ふ。

神道

一 國常立尊未だ此の世に出現めされぬ以前、如何んが汝父母未生以前本來の面目。

答 又手當胸して立つ。

二 搦して曰く、國常立尊は何う出現めされたか。

答 又手當胸して立つ。

三 其の次に山を生むとは什麼か。

答 兩手に力を入れて少し展げ立つて、是れ一山と云ふ。

四 その次に國を生むとは什麼か。

答 平伏して、大日本何々の國と其他の國名を云ふ。

五 天照大神は何處から出現めされたか。

答 天に二日なく、乾坤只一人。

六 太神宮には大の字の下に一點あり、大修行底の人此の一點を打ち替へ見よ。

答 起立して、一指は天を指し、一指は地を指し「天上天下唯我獨尊」と云ふ。

經文

一 煩惱即菩提とは作麼生。

答 「憎い、可愛い」と莊重に云ふ。

二 これに世語を著けて見よ。

答 君を思へば照る日も曇る晴れた月夜も暗くなる。

三 涅槃像中一の妙處あり指し將ち來れ。

答 「和尚が御遷化になつたらば、今後誰に就て修行すればよからうか」とガツカリした様子をす。

四 涅槃の境涯は什麼ぢや。

答 涅槃像の如く北枕に寝る。

五 拶して曰く、涅槃眞の境涯は什麼ぢや。

答 涅槃像の如く北枕に横臥す、此は師家手を以て學人の口に擬し呼吸を檢す。學人其の間呼吸せざる也。

六 拶して曰く、涅槃像中何に依つてか猫の居らざる。

答 何故に鼠居らざる。

七 金剛經に、應に住する處無うして而も其の心を生ずとあり作麼生。

答 父は、こののらくら出て行けと怒鳴り、母は、お、誰れがくよしくくとあやす。

八 これに世語を著けよ。

答 可愛やく、饅頭見ても花見ても。

九 過去心不可得、現在心不可得、未來心不可得とあり、大修行底の人何れの心を以て此の餅を食はん。

答 お腹がすいた。此の餅いくら、二つ三つもらふよ。

一〇 若し人の爲に輕賤せられんに、此の人先世の罪業にて應に惡道に隨すべきに、今世の人に輕賤せらるるを以ての故に、先世の罪業即ち爲に消滅して、當に阿耨多羅三菩提を得べしとあり、作麼生。

答 此の馬鹿坊主サツサト出てうせろ。

一一 これに本語を著けよ。

答 相罵饒汝接背 相唾饒儻潑水。

三 是の法は平等にして高下あること無しとあり作麼生。

答 富士山は高く愛宕山は低し。

三 世界に非ざるもの是を名けて世界となす。

答 西は臺灣澎湖島の端、東は千島占守島の端。

一四 阿耨多羅三藐三菩提は皆此の經より出づと作麼生か此の經。

答 師家に一掌を與ふ。

一五 若し色を以て我を見、音聲を以て我を求めば是の人邪道を行ず、如來を見たてまつること能はずとは作麼生。

答 一心不亂に摩訶般若心經を讀む。

二六 若し人三世一切の佛を知らんと欲せば應に法界性を觀ずべし
一切は唯心造なりとあり、三世とは如何。

答 先刻、只今、後刻。

二七 一切の佛とは如何。

答 自分の手近の人々の名前を列擧す。

二八 一切唯心造とは如何。

答 大工は家を造り、豆腐屋は豆腐を造る。

二九 華嚴經に云く、吾が不見の時、何ぞ吾が不見の處を見ざる。

若し不見を見ば、自然に彼の不見の相に非ず。若し吾が不見

の地を見ずんば、自然に物に非ず。云何ぞ汝に非ざらんと、
自然に物に非ず、云何ぞ汝に非ざらんとは如何。

答 左右を顧みて「自然に物に非ず、云何ぞ汝に非ざらん」と
云ふ。

三〇 これに語を著けよ。

答 象罔到時光燦爛。離婁行處浪滔天。

三一 普門品に觀音大士三十三身を現すとあり、即今汝の三十三現
身は如何。

答 上は天子將軍より、下は乞食非人の眞似まで自由にやつて
のけます。

古 則

一、黃龍三關

黃龍禪師隆慶閑禪師に問うて云く、人々箇の生縁の處あり、如何なるか是れ汝が生縁の處、對へて曰く、早晨白粥を喫し今に至つて飢を覺ふ。又問ふ、我が手何ぞ佛手に似たる。對へて曰く、月下琵琶を弄す。又問ふ、我脚何ぞ驢脚に似たる。

對へて曰く、鷺鷥雪に立つ同色に非ず、師毎に此の三語を以て學者に問ふ。能く其の旨に契ふ者なし、天下の叢林目けて三關となす。纔に酬者あれば、師可否となく目を斂めて危坐す。人の其

の意を涯むること莫し、此を延いて又其の故を問ふ、師云く、己に關を過ぐる者は臂を掉つて徑に去安して關吏あることを知る、更に従つて可否を問はば、此れ未だ關を透らざる者なり。

一 我手何ぞ佛手に似たる(何故手を手と云ふ。)

答 脚を突き出して曰く、「何故脚を脚と云ふ。」

二 語を著けよ。

答 月下彈琵琶。

三 我が脚何ぞ驢脚に似たる(何故足を足と云ふ。)

答 手を突き出して曰く、「何故手を手と云ふ。」

四 語を著けよ。

答 屐齒印青苔。

五 如何なるか是れ汝が生縁の處ぞ。

答 「私の生れは何處其處」と其の郷里を云ふ。

六 語を著けよ。

答 君家住何處。 妾住在横塘。

二、兜率三關

兜率悅和尚、三關を設けて學者に問ふ、撥草參玄は只見性を圖る、即今上人の性甚れの處にか在る、自性を識得すれば方に生死を脱す。眼光落る時、作麼生か脱せん。生死を脱得すれば便ち去

處を知る。四大分離して甚の處に向つてか去る。

一 即今上人の性甚れの處にか在る。

答 周圍を見廻して何か探す様子をすする。

二 語を著けよ。

答 只在此山中。雲深不知處。

三 眼光落る時作麼生か脱せん。

答 手足をもちき七顛八倒臨終苦悶の様子をすする。

四 語を著けよ。

答 毒箭攢胸。

五 四大分離して甚の處に向つてか去る。

答 死人の様に仰臥する。

六 語を著けよ。

答 斷碑横古路。

三、臨濟三句

臨濟上堂、僧問ふ、如何なるか是れ第一句、師云く、三要印開して朱點側つ、未だ擬議を容れざるに主賓分る。問ふ、如何なるか是れ第二句、師云く、妙解豈に無著の間を容れんや、漚和争でか截流の機を負はん。問ふ、如何なるか是れ第三句、師云く、棚頭に傀儡を弄するを看取せよ、抽牽都來裡に人あり。

一 如何なるか是れ第一句。

答 いろはにはほへと。

二 如何なるか是れ第二句。

答 ちりぬるをわか。

三 如何なるか是れ第三句。

答 よたれそつね。

四、臨濟四料間

臨濟晚參、衆に示して云く有時は人を奪つて境を奪はず、有時は境を奪つて人を奪はず、有時は人境俱に奪ひ、有時は人境俱に

奪はず。

一 人を奪つて境を奪はず。

答 天井、疊、机、火鉢と其の室内にあるものを列挙す。

二 語を著けよ。

答 到頭霜夜月。任運落前溪。

三 境を奪つて人を奪はず。

答 盡天盡地一自己。

四 語を著けよ。

答 天上天下唯我獨尊。

五 人境俱に奪ふ。

答 東海道人一人も通らない、木曾山中狐一疋も居ない。

六 語を著けよ。

答 晋楚失其富、貴育失其勇。

七 人境俱に奪ふ。はらう

答 主客器物一切のもの皆其の儘の處。

八 語を著けよ。

答 皇天無私。惟徳性仰。

五、聖諦第一義

梁の武帝達磨大師に問ふ、如何なるか是れ聖諦第一義、磨曰く

廓然無聖。帝曰く、朕に對する者は誰ぞ。磨曰く、不識。帝契はず。達磨遂に江を渡つて魏に至る。帝後に舉して志公に問ふ。志公曰く、陛下還つて此の人を知るや否や。帝曰く、不識。志公曰く、此れは是れ觀音大士、佛心印を傳ふ。帝悔ひて遂に使を遣して去つて請せんとす。志公曰く、道ふこと莫れ、陛下使を發し去つて取らんと。闔國の人去るも他亦回らず。

一 廓然無聖。

答 又手當胸して立つ。

二 語を著けよ。

答 南村北村雨一犁。新婦餉姑翁哺兒。

三 不識。

答 達磨も識らぬといふが自分も識らぬ。

四 拶して曰く、何として知らざる。

答 釋迦彌陀も識らぬ。

五 語を著けよ。

答 日月照臨不到。天地蓋覆不盡。

六、百丈野狐

百丈和尚、凡そ參の次、一老人有り、常に衆に隨つて法を聽く。衆人退けば、老人も亦退く。忽ち一日退かず。師遂に問ふ、面前

に立つ者は復た是れ何人ぞ。老人云く、諾、某甲は非人なり、過去迦葉佛の時に於て、曾て此の山に住す。因に學人問ふ、大修行底の人、還つて因果に落つるや也たなしや。某甲對へて云く、不落因果。五百生野狐身に墮す。今請ふ、和尚一轉語を代へて、貴ふらくは野狐を脱せしめよといふて遂に問ふ。大修行底の人還つて因果に落つるや也た無しや。師云く、不昧因果。老人言下に於て大悟し、作禮して云く、某甲已に野狐身を脱して山後に住在せん、敢て和尚に告す、乞ふ亡僧の事例に依れと、師維那をして白槌して衆に告げしむ。食後に亡僧を送らんと。大衆言議すらく、一衆皆安し、涅槃堂に又人の病む無し、何が故ぞ是の如くなると。食

後只師の衆を領して、山後の巖下に至つて、杖を以つて一死野狐を挑出して乃ち火葬に依るを見る。師晚に至つて上堂し、前の因縁を擧す。黃檗便ち問ふ。古人錯つて一轉語を祇對して五百生野狐身に墮すと、轉轉して錯らずんば、箇の甚麼とか作る合き。師云く、近前來、伊が與に道はん。黃檗近前して師に一掌を與ふ。師手を拍つて笑つて云く、將に謂へり、胡鬚赤と、更に赤鬚胡有り。

一 不落因果、不昧因果。

答 不落因果、コンコン、不昧因果ワンワン。

二 拶して曰く、是の如く廣き百丈山に何故死野狐が居るか。

答 此の寺の境内にも鼯の一疋位は死んで居る、況んや廣い百丈山に死野狐の居るのは別に不思議でもありませんまい。

三 將に謂へり胡鬚赤と、更に赤鬚胡有り。

答 毛唐の鬚は赤いと思つたら赤鬚の毛唐であつた。

四 語を著けよ。

答 將謂黃連甜似蜜、誰知蜜苦似黃連。

七、維摩入不二

維摩詰、文殊師利に問ふ、何等か是れ入不二の法門。文殊曰く、我が意の如くんば、一切法に於て、無言無説、無示無識、諸の問答を

離る、是れを入不二の法門と爲す。是に於て文殊師利、維摩詰に問ふ、我等各自に説き已れり、仁者當に説くべし。何等か是れ菩薩入不二の法門。雪竇云く、維摩什麼と道ふも復た云く、勘破了。

一 維摩が默然の復のどん底は如何。

答 師家に一掌を與ふ。

二 文殊の意旨のある處は如何。

答 無言無説、無示無識、是れを入不二の法門となす。

八、無位真人

臨濟上堂云く、赤肉團上一無位の真人あり、常に汝等諸人の面門より出入す。未證據の者は看よ看よ。時に僧あり問ふ、如何なるか是れ無位の真人。師禪床を下り把住して云く、道へ道へ。其の僧擬議す。師托開して云く、無位の真人、是れ什麼の乾屎橛ぞと、便ち方丈に歸る。

一 看よ看よとは如何。

答 驚倒する様子をすする。

二 道へ道へとは如何。

答 御免下さいと云ふ。

三 無位と非無位と相去る事多少ぞ、速に道へ速に道へ。

答 幾重にも御許し下さいませ。

九、趙州布衫

僧趙州に問ふ、萬法一に歸す、一何れの處にか歸す。州云く、我れ青州に在つて一領の布衫を作る。重さ七斤。

一 萬法一に歸すとは如何。

答 その疊の上に指にて一の字を書く。

二 一何れの處にか歸すとは如何。

答 一萬法に歸す。

三 世語を著けよ。

答 箱根山、籠に乗る人擔ぐ人、其の又草鞋を作る人。

10、華嚴法界

華嚴の四法界、理法界、事法界、理事無礙法界、事事無礙法界。

一 理法界とは如何。

答 世界中ガラツとして塵一本もありません。

二 これに語を著けよ。

答 萬里一條鐵。

三 事法界とは如何。

答 森羅萬象皆悉く大光明を放つて居ます。

四 これに語を著けよ。

答 春江潮水連海平、海上明月共潮生。

五 理事無礙法界とは如何。

答 星と堇と相對し、花と月と相對し、山と川と相對し、夜と晝と相對し、男と女と相對す。

六 これに語を著けよ。

答 落霞與孤鶩齊飛、秋水長天共一色。

七 事事無礙法界とは如何。

答 山は山で大光明、川は川で大光明、男は男で大光明、女は女で大光明。

八 これに語を著けよ。

答 草色青青柳色黃、桃花歷亂李花香。

二、無縫塔

肅宗皇帝、忠國師に問ふ、百年の後、須ゆる所何物ぞ。國師云く、老僧が與に箇の無縫塔を作れ。帝曰く、師の塔様を請ふ。國師良久して云く、會すや。帝云く、不會。國師云く、吾に付法の弟子耽源あり、却つて此の事を暗ず、請ふ詔して之に問へ。國師遷化の後、帝耽源に詔して、此の意如何と問ふ。源云く、湖の南潭の北。雪竇著語に云く、獨掌は浪に鳴らず、中に黃金あり一國

に充つ。雪竇著語に云く、山形の拄杖子、無影樹下の合同船。雪竇著語に云く、海晏河清、瑠璃殿上に知識無し。雪竇著語に云く拈了。

一 塔様は如何。

答 叉手當胸して立つ。

二 國師良久に語を著けよ。

答 渭北春天樹。江東日暮雲。

三 湘の南潭の北とは如何。

答 此方は床の間で、此方は襖間。

四 中に黃金あり一國に充つとは如何。

答 座敷一杯備後疊が敷き詰められてある。

五 無影樹下の合同船とは如何。

答 おれがかやうにトン坐つてゐる。

六 瑠璃殿上知識無しとは如何。

答 盡十方法界に一人の知己もない。

三、臨濟孤峯

臨濟上堂云く、一人は孤峯頂上に在つて出身の路無く、一人は十字街頭に在つて亦向背無し、那箇か前に在り、那箇か後へに在る、維摩詰と作さざれ、傳大士と作さざれ。珍重。

一 一人は孤峯頂上に在つて出身の道無しとは如何。

答 釋迦でも達磨でも一寸でもものぞかせもするものか。

二 一人は十字街頭に在つて亦向背無しとは如何。

答 老若男女それ相應に接得する。

三、不入涅槃

文殊所説摩訶般若に曰く。清淨の行者涅槃に入らず、破戒の比丘地獄に墮せず。

一 清淨の行者涅槃に入らずとは如何。

答 百姓は鍬を擔ぎ、大工は鉋を持ち、商人は算盤をはぢいて

働いて居ます。

二 破戒の比丘地獄に墮せずは如何。

答 鶏は時を告げ、狗は門を守り、猫は鼠を捕ります。

三 拶して云く、どうして墮ちぬか。

答 既に墮ち切つてしまつて居るから墮とか不墮とかの音沙汰は御座らぬ。

四 これに語を付けよ。

答 鶯逢春暖歌聲滑、人逢世平笑臉開。

一四、庭前の柏樹子

趙州因に僧問ふ、如何なるか是れ祖師西來意。州云く、庭前の柏樹子。僧云く、和尚境を將て人に示すこと莫れ。州云く、我れ境を將つて人に示さず。僧云く、如何なるか是れ祖師西來意。州云く、庭前の柏樹子、後來法眼、覺鐵觜に問ふて云く、承り聞く趙州に柏樹子の話ありと、是なりや否や。觜云く、先師に此の語無し、先師を謗すること莫れ。眼云く、眞の獅子兒能く獅子吼す。

一 如何なるか是れ庭前の柏樹子。

答 叉手當胸起立して、「柏樹子」と答へる。

二 これに語を著けよ。

答 寒松一色千年別。

三 これに世語を著けよ。

答 祝ひ芽出度の若松様よ。枝も榮えりや、やれ葉も繁る。

四 先師を謗すること莫れとは如何。

答 又手當胸起立して、「柏樹子」と答へる。

五 覺鐵背に語を著けて見よ。

答 好兒不使爺錢。

六 此の則全體に語を著けて見よ。

答 庭前の柏樹子。

七 拶して曰く、柏樹の根は何處まで届くか。

答 横には十方に亘り、縦には三際を貫く。

八 拶して曰く、其の葉の色は如何。

答 桃の夭夭たる其の葉蓁々たり。

一五、智門般若體

僧智門に問ふ、如何なるか是れ般若の體、門云く、蚌明月を含ま、僧云く、如何なるか是れ般若の用。門云く、兔子懷胎。

一 般若の體如何。

答 又手當胸する。

二 般若の用は如何。

答 そのまま前に曲る。

二六、南泉斬猫

南泉、一日、東西の兩堂猫兒を争ふ。南泉見て遂に提起して云く、道ひ得ば即ち斬らず。衆、無對。泉猫兒を斬つて兩段となす。

答 キヤツと猫の死するが如き聲を出す。

二七、趙州戴草鞋

南泉復た前話を舉して趙州に問ふ。州便ち草鞋を脱して頭上に於て戴いて出づ、南泉云く、子若し在しかば、恰も猫兒を救ひ得てん。

答 ニヤンと生ける猫の聲を出す。

二八、六祖衣鉢

六祖因に、明上座趨つて大瘦嶺に至る。祖、明の至るを見て、即ち衣鉢を石上に擲つて云く、此の衣は信を表す、力をもつて争ふべけんや、君が將ち去るに任す。明遂に之を擧ぐるに、山の如くにして動ぜず、跣蹶悚慄す。明日く、我れ來つて法を求む、衣の爲めに非ざるなり。願くは行者開示したまへ。

答 「信を表す」と云ふ。

一九、雲巖大悲手眼

雲巖、道吾に問ふ、大悲菩薩許多の手眼を用ひて什麼をかなす。吾云く、人の夜半に背手にして枕子を摸するが如し。巖云く、我れ會せり。吾云く、汝作麼生が會す。巖云く、徧身是れ手眼。吾云く、道ふことは太煞道ふ、只八成を道ひ得たり。巖云く、師兄作麼生、吾云く、通身是れ手眼。

一人の夜半に背手にして枕子を摸するが如しとは如何。

答 手揉みをしながら、「肩を揉んで上げませう。」

二 徧身、通身は如何。

答 同一物だが、扇子とも扇あふぎとも云ひます。

二〇、俱胝一指

俱胝和尚、凡そ所問あれば只一指を豎つ。

一 俱胝の意旨はどうぢや。

答 一指を豎てる。

二 その一指を斬る勢をなして、「どうぢや。」

答 斬つても斬れませぬ、上は三十三天より、下は那落の底まで只一指であります。

三、これに語を著けよ。

答 萬里一條鐵。

三、離却語言

風穴和尚、因に、僧問ふ、語默離微に渉る、如何が不犯を通せん。穴云く、長へに憶ふ江南三月の裏、鷓胡啼く處百花香し。

一 如何が不犯を通せんとは如何。

答 四方を見まはす様子をする。

二 長へに憶ふ江南三月の裏、鷓胡啼く處百花香しとは如何。

答 「長へに憶ふ江南三月の裏、鷓胡啼く處百花香し」と云ふ。

三、倩女離魂

五祖、僧問うて云く、倩女離魂、那箇か是れ眞底。

一 那箇か是れ眞底。

答 「那箇か是れ眞底」と云ふ。

二 これに語を著けよ。

答 只箇一點無明焰、煉出人間大丈夫。

三 倩女の俗諦門は如何。

答 惜しい、欲しい、憎くい、可愛い。

三、佛性三轉語

佛性禪師三轉語に曰く、向上の一路千聖共に行く、調達甚なに因つてか地獄に入る。達磨東土に來らず、二祖西天に往かず、立沙甚に因つてか脚指頭を墜破す、虚空を打破する底の人甚いれの處に向つてか安著せん。

一 向上の一路千聖共に行くとは如何。

答 向上の一路が何だ、グヅ／＼して居て何になるか。

二 達磨東土に來らずとは如何。

答 氣を付けやがれ。

三 虚空を打破する底の人とは如何。

答 即今此處にあり。

四、香嚴樹上

香嚴知閑禪師云く、人の樹に上るが如し、口に樹枝を啣み、手枝を攀ぢず、脚樹を踏まず。樹下に人有つて西來意を問はんに、對へずんば即ち他の所問に違く、若し對へば又喪身失命せん、正與麼の時作麼生か對へん。虎頭上座と云ふ者あり云く、上樹は即ち問はず、未だ樹に上らざる時請ふ和尚道へ、師呵々大笑す、雪竇云く、樹上に道ふは即ち易く、樹下に道ふは即ち難し、老僧樹

に上らん、一問を將ち來れ。

一 樹上の一句は如何。

答 起ち上りて樹にぶら下る様子をす。

二 樹下の一句は如何。

答 樹より落ちたる様子をして、「あいたく」と云ふ。

三五、乾峯一路

乾峯和尚、因に僧問ふ、十方薄伽梵、一路涅槃門、未審し路頭其處の處にか在る。峯拄杖の拈起し、劃一劃して云く、者裏に在り、後僧雲門に請益す、門扇子を拈起して云く、扇子踔跳して三十

三天に上り、帝釋の鼻孔に築著し、東海の鯉魚打つこと一棒すれば、雨盆に似たり。

一 未審し路頭甚處の處にか在る。

答 師家の顔に一掌を與へる。

二 薄伽梵とは如何。

答 「佛國土」云ひながら四方を見まわす。

三六、婆子燒庵

昔し婆子あり、一庵主を供養して二十年を經、常に一の二八の女子をして飯を送り給侍せしむ、一日女をして抱定せしめて曰く、

正與麼の時如何ん。主曰く、古木寒巖に倚つて三冬暖氣無し。女子歸つて婆に舉似す。婆曰く、我れ二十年祇箇の俗漢を供養し得たりと。遂に遺出して、庵を焼却す。

一 正與麼の時如何。

答 「この糞尼ツチヨ、婆々の禪をかついで何のぞまだ」と怒鳴り付ける。

二 これに語を著けよ。

答 就中明暗相凌處。天外出頭誰解看。

二七、靈雲見桃

福州靈雲の志勸禪師、因に桃花を見て悟道す。頌あり云く、三十年來劍客を尋ね、幾回か葉落ち又枝を抽んず、桃花を一見してより後、直ちに如今に至るまで更に疑はず。後に瀉山に舉似す。山曰く、縁より入る者は永く退失せず、汝善く護持せよ、玄沙聞いて云く、諦當なることは甚だ諦當なり、敢て保す、老兄猶ほ未徹在なることを。雲門云く、甚の徹不徹とか説かん、更に參ぜよ三十年。後來大川の濟和尚上堂、僧出でて前頌を舉して問ふ、大川答へて云く、賊と作る人心虚しと。

答 見るも花なら、見らるるも花。

二八、關山賊機

關山和尚曰く、柏樹子の話に賊機あり。

答 君を思へば照る日も曇る、晴れた月夜も闇となる。

二、智不到處

古徳曰く、智不到の處一句を道へ。

答 お早うと云うておじぎをする。

三、洞山麻三斤

僧洞山に問ふ、如何なるか是れ佛。山云く麻三斤。

答 一ツ二ツ三ツ四ツと魚屋が魚を數へる様子をす。

これに語を著けよ。

答 如麻又似粟。

三、趙州勘婆

趙州因に僧婆子に問ふ、臺山の路甚の處に向つてか去る。婆云く、驀直去。僧纔に行くこと三五歩。婆云く、好箇の師僧、又恁麼にし去る。後、僧あり、州に舉似す。州云く、待て、我れ爾が與めに這の婆子を勘過せん。明日便ち去つて、亦是の如く問ふ。婆亦是の如く答ふ。州歸つて衆に謂つて曰く、臺山の婆子、我れ爾が與めに勘破し了る。

一 此の則はどうぢや。

答 椽の下の力持ち。

二 これに語を著けよ。

答 只願君王相願意。臨臺幾度畫蛾眉。

三、古帆未掛

僧巖頭に問ふ、古帆未だ掛けざる時如何。頭云く、小魚大魚を呑む。云く、掛けて後如何。頭云く、後園の驢草の喫す。虚堂、南浦に問ふて曰く、古帆未だ掛けざる時如何。浦云く、雌螟眼裡五須彌堂。云く、掛けて後如何。浦云く、黄河北に向つて流る。

一 未だ掛けざる時如何。

答 両袖を右左に展げて默然たり。

二 掛けて後如何。

答 今日は四九日で、剃髮掃除、それが了つたら開浴であります。

三、至道無難

趙州衆に示して云く、至道無難、唯嫌揀擇、纔に語言あれば是れ明白、老僧は明白裏に在らず、是れ汝還つて護惜すや也た無しや。時に僧あり問ふ、既に明白裏に在らず、箇の什麼をか護惜せ

ん。州云く、我れ亦知らず。僧云く、和尚既に知らず、什麼としてか却つて道ふ、明白裏に在らずと。州云く、事を問ふて即ち得ば、禮拜し了つて退け。

一 至道。

答 又手當胸して起立し、「至道」と云ふ。

二 無難。

答 山は高く川は低く、柱は豎に敷居は横。

三 唯嫌揀擇。

答 惜し欲しい、憎い可愛い、善い悪い。

四 語を著けよ。

答 唯愛清臺新曆日。懶見韓子送窮文。

三、州勘庵主

趙州一庵主の處に到り問ふ、有りや有りや。主拳頭を豎起す。州曰く、水淺くして是れ船を泊むる處にあらずといつて便ち行く。又一庵主の處に到つて問ふ、有りや有りや。主亦拳頭を豎起す。州曰く、能縦能奪能殺能活といつて便ち作禮す。

一 能縦能奪能殺能活といつて便ち作禮すとは畢竟どうぢや。

答 能縦能奪能殺能活といひながら拳頭を豎起する。

二 これに語を著けよ。

答 在江南爲橋、在江北爲枳。

三 これに世語を著けよ。

答 ところかはれば品かはる、浪華のあしは伊勢のはまをぎ。

三五、黄檗墮酒糟漢

黄檗衆に示して云く、汝等諸人、盡く是れ墮酒糟の漢。恁麼に行脚せば何の處に今日あらん。還つて大唐國裏に禪師無きことを知るや。時に僧あり、出でて云く、只諸方の徒を匡し、衆を領するが如きんば、又作麼生。檗云く、禪無しとは道はず、只是れ師無し。

一 還つて大唐國裏に禪師無きことを知るや。

答 お山の大將俺れひとり。

二 これに語を著けよ。

答 項王暗啞叱咤千人皆廢。

三 禪無しとは道はず、只是れ師無し。

答 そうぢや、そうぢや、わしがわるかつた。

四 これに語を著けよ。

答 楚人一炬。可憐焦土。

三六、智門蓮華荷葉

僧智門に問ふ、蓮華未だ水を出でざる時如何。門云く、蓮華。

僧云く、水を出でて後如何。門云く、荷葉。

一 未だ水を出でざる時如何。

答 榘鉢。

二 水を出でて後如何。

答 牡丹餅。

三七、陸互天地同根

陸互大夫南泉と語話する次で、陸云く、肇法師道く、天地と我れと同根、萬物と我れと一體と。也た甚だ奇恠なり。南泉庭前の

花を指して、大夫を召して云く、時の人此の一株の花を見ること夢の如くに相似たり。

頌に曰く、聞見覺知一一に非ず、山河は鏡中に在つて觀ず。霜天月落ちて夜將に半ならんとす。誰れと共に澄潭を照らして寒き。

一時の人此の一株の花を見ること、夢の如くに相以たり。

答 榘鉢の如く牡丹餅の如し。

二 南泉の見方。

答 あゝ見事に咲いた。

三 二人の居場所を分けて見よ。

答 陸互は有功用の境涯、南泉は無功用の境涯。

四 日用の事で分けて見よ。

答 陸互は袴で四角張り、南泉は襜袍姿にくはへ煙管でブラブラ出掛けるところ。

五 頌の前半。

答 「聞見覺知一一に非ず」と云ひながら、指を以て森羅萬象を一々指摘する様子をし、「山河は鏡中に在つて觀ず」と云ひながら、又手當胸してうつつむき、森羅萬象を收めたる様子をす。

六 頌の後半。

答 夜も大分更けたが、話し相手も無し、どれ小便でもして來

て寝るとしようか。

七 語を著けよ。

答 越王勾踐破吳歸。義士還家盡錦衣。宮女如花滿春殿。唯今只有鷓鴣飛。

三、首山竹篋

汝州首山省念禪師、因に、竹篋を拈じ衆に示して云く、汝等諸人、若し喚んで竹篋と作さば即ち觸る、喚んで竹篋と作さざれば即ち背く。汝諸人、且らく喚んで什麼とか作す。時に葉縣省和尚會下に在り、乃ち近前して掣得し、折つて兩截と作し、階下に抛

向して却つて云く、是れ什麼ぞ。師云く、瞎、大慧禪師拈じて云く、速に道へ、速に道へ。

一 且らく喚んで、什麼とか作す。

答 拳頭を突き出して、「竹篋、竹篋」と云ふ。

二 若し然らば一句合頭語萬劫繫驢橛。

答 喚んで、小便杓となし肥桶となす。

三 竹篋の用は如何。

答 杖ごも、箸とも、杓子ともなす。

四 背觸の二字を片付けよ。

答 床の間の隅に片付ける様子をす。

五 喚んで虚空と作せば得ず、喚んで什麼とか作す。

答 とんぼ返りをして見する。

三元、體露金風

僧雲門に問ふ、樹凋み葉落つる時如何。雲門云く、體露金風。

一 これに世語を著けよ。

答 戀にこがれて思ひにやつれやせたはおまへにわからぬか。

二 この歌は何處から來たのか。

答 「祖庭荒涼寂び衰へて、あゝ、どうして換したのか」と嘆息の様子をする。

三 畢竟どうぢや。

答 今時那邊回互三昧である。

四〇、佛早留心

毘婆尸佛早く心を留む、直に如今に到るまで妙を得ず。
一世語を著けよ。

答 坂は照るく、鈴鹿は曇るあひの土山雨がふる。

四一、雲門花藥欄

僧雲門に問ふ、如何なるか是れ清淨法身。門云く、花藥欄。僧

云く、便ち恁麼にし去る時如何。門云く、金毛の獅子。

一 花藥欄。

答 又手當胸して立ち、「此の糞雪隠」と云ふ。

二 金毛の獅子。

答 脱糞する様子をする。

三 これに語を著けよ。

答 破欄衫裡清風動。

四二、南泉遷化

長沙岑禪師、因に、三聖、秀首座をして問はしめて云く、南泉遷化

して甚麼の處に向つてか去る。師云く、石頭沙彌たりし時、曾て六祖に見ゆ。秀云く、沙彌たりし時を問はず、南泉遷化して甚麼の處に向つてか去る。師云く、伊をして尋思し去らしむ、秀云く、和尚千尺の寒松ありと雖も、且つ條を抽くの石筍なし。師默然たり。秀云く、和尚の答話を謝す。師亦默然たり。秀回つて三聖に擧以す。聖云く、若し實に與麼ならば、臨濟に勝ること七步、然も是の如くなりと雖も、待て我れ明日更に看過せん。明日に至つて乃ち問ふ、承り聞く、和尚昨日南泉遷化の一則の話に答ふる、謂つべし光前絶後、今古聞くこと罕なり。師亦默然たり。

一 石頭沙彌たりし時、曾て六祖に見ゆ。

答 副隨の何某は門前に豆腐買ひに行つた。

二 沙彌たりし時は問はず、南泉遷化して甚麼の處に向つてか去る。

答 今日はお客があるから御馳走する。

三 師亦默然たり。

答 只だ默する。

四 これに語を著けよ。

答 渭北春天樹。江東日暮雲。

五 伊をして尋思し去らしむ。

答 「あゝ、今頃は何處に行かれたやら」と、四邊を見廻しながら

云ふ。

六 これに語を著けよ。

答 一把柳枝收不得。和風搭在玉欄干。

七 世語を著けよ。

答 向ふをとほるは清十郎ぢやないか、笠がよう似たすがさが。

四、大隋劫火洞然

僧大隋に問ふ、劫火洞然として大千俱に壊す、未審し、這箇壊か不壊か。僧云く、恁麼なるときんば他に随ひ去るか。隋云く、

他に随ひ去る。

一 大隋が壊と云へるは如何。

答 「バリバリ、バリバリ」と云ひながら、兩手を動かして、四方八面猛火に包まれたる様子をする。

二 他に随ひ去るとは如何。

答 「トツ、ドツ、ドツ」と云ひながら、兩手を動かして、火が流れる様子をする。

四、風穴祖師心印

風穴、郢州の衙内に在つて、上堂に云く、祖師の心印、形鐵牛の

機に似たり。去れば即ち印住し、住すれば即ち印破す。只去らず住せざるが如きんば、印するが即ち是か、印せざるが即ち是か。時に盧陂長老あり、出でて問ふ。某甲に鐵牛の機あり、請ふ師印を搭せざれ。穴云く、鯨鯢を釣つて、巨浸を澄ましむるに慣つて、却つて嗟す、蛙歩の泥沙に驥すること。陂佇思す。穴喝して云く、長老何ぞ進語せざる。陂擬議す。穴打つこと一拂子して云く、還つて話頭を記得すや、試みに舉せよ看ん。陂口を開かんと擬す。穴又打つこと一拂子。牧主云く、佛法と玉法と一般。穴云く、箇の什麼の道理をか見る。牧主云く、斷ずべきに當つて斷せざれば返つて其の亂を招く。穴便ち下座す。

一 形鐵牛の機に似たりとは如何。

答 石臼の如く、たて臼の如し。

二 何として然るか。

答 挺子でも動かぬ。

三 これに語を著けよ。

答 沿牆弄蝴蝶。臨水擲蝦蟆。

四 去れば即ち印住し、住すれば即ち印破す、只去らず住せざるが如きんば、印するが即ち是か印せざるが即ち是かと、かう云ふ風にどんと尋ねて來たらば、どうすればよいか。

答 師家を一掌する。

四、翠巖眉毛

翠巖夏末に衆に示して云く、一夏以來、兄弟の爲めに説話す。

看よ、翠巖が眉毛ありや。保福云く、賊と作る人心虚なり。長慶云く、生ぜり。雲門云く、關。

一 長慶云く、生ぜり。

答 はえた、はえた。

二 拶して云く、是れ什麼の處か是れ生ぜる處ぞ。

答 向ふの山から垣根の邊まで、ずつと一面に青草がはえた。

三 これに語を著けよ。

答 雨後青山青轉青。

四 保福云く、賊と作るの人心虚なり。

答 泥棒は胸がびくつくわい。

五 雲門云く、關。

答 關と叫んで疊を叩く。

六 これに語を著けよ。

答 父有迷子之訣。子有打爺之拳。

四、許老胡知

只だ老胡の知を許す、老胡の會を許さず。

一 老胡の知を許す。

答 ウンよしよし。

二 老胡の會を許さず。

答 いかんいかん。

三 これに語を著けよ。

答 其知可及。其愚不可及也。

四七、雲門對一説

僧雲門に問ふ、如何なるか是れ一代時教。門云く對一説。
一 對一説。

答 大臣に逢へば大臣に説き、乞食に逢へば乞食に説き、男に逢へば男に説き、女に逢へば女に説く。
二 これに語を著けよ。

答 糞火埋邊話長短。

四八、雲門倒一説

僧雲門に問ふ、是れ目前の機にあらず、亦目前の事に非ざる時如何。門云く、倒一説。

一 倒一説の意旨に語を著けよ。

答 珊瑚枕上兩行淚。半是思君半恨君。

二 是れ目前の機にあらず、亦目前の事に非ざる時如何、これに
どう答へるか。

答 音調莊重に、「是れ目前の機にあらず、亦目前の事に非ざる
時」と云ふ。

三 これに語を著けよ。

答 奪賊槍煞賊。

四 兎、金牛飯桶

金牛和尚、齋時に至る毎に、自ら飯桶を將つて、僧堂前に於て
舞を作して、呵々大笑して云く、菩薩子喫飯來。雪竇云く、然も

此の如くなりと雖も、金牛是れ好心にあらず。僧長慶に問ふ、古
人道ふ、菩薩子喫飯來と、意旨如何。慶云く、大に齋に因つて慶
讚するに似たり。

一 菩薩子喫飯來に如何に挨拶するか。

答 「腹一杯ぢや」と腹鼓を打つ。

二 然も是の如しと雖、金牛是れ好心にあらず。

答 飯櫃はからつばぢや、

三 慶云く、大に齋に因つて慶讚するに似たり。

答 食畢の偈、「飯食已訖色力充。威震十方三世雄。廻因轉果不
在念。一切衆生獲神。」を誦す。

五、薬山看箭

僧薬山に問ふ、平田浅草、麈鹿群を成す、如何が塵中の塵を射得せん。山云く、箭を看よ。僧身を放つて便ち倒る。山云く、侍者這を死漢を拖き出せ。僧便ち走る。山云く、泥團を弄する漢、什麼の限りかあらん。雪竇拈じて云く、三步には活すと雖、五歩には須らく死すべし。

一 箭を看よ。

答 矢をつがへる様子をす。

二 身を放つて便ち倒る。

答 倒るゝ様子をす。

三 侍者這の死漢を拖き出せに就て僧に代つて道へ。

答 和尚死なれた。

四 薬山に代つて道へ。

答 今日と云ふ今日はおれがやられたわい。

五、牛過窓櫺

五祖演禪師曰く、譬へば水牯牛の窓櫺を過ぐるが如し、頭角四蹄、都べて過ぎ了る、甚麼に因つてか尾巴過ぎ得ざる。

一 此の牛何時生れたか。

答 威音王以前。

二 此の牛の姿はごうぢや。

答 大工はカチノ、左官はベトク。

三 語を著けよ。

答 南村北村雨一犁、新婦餉姑翁哺兒。

四 めうしか、をうしか。

答 大きな罌丸をぶら下げたをすです。

五 毛色はどうぢや。

答 上著は鐵色、中著は鼠色、肌著は白。

六 飼ひ方はどうぢや。

答 朝は麥粥、晝は家常の飯、夜は雜炊。

七 其の牛の居處は何處ぢや。

答 獨坐幽篁裏、彈琴復長嘯。

八 その牛の發する處は。

答 八角の磨盤空裏に走る。

九 我は愛す過ぐる底を。

答 いま角を振り立てて和尚を突き飛ばして行きました。

一〇 甚麼に因つてか巴尾過ぎ得ざる。

答 師家の鼻先きをつまみ、尻を打ちて「シツシツ、びくとも動かぬ」と云ふ。

二 語を著けよ。

答 同來翫月人何處。風景依稀似去年。

五、天皇恁麼

欽山巖頭雪峰と徳山に到つて乃ち問ふ、天皇も也た恁麼に道ふ、龍潭も也た恁麼に道ふ、未審し、徳山作麼生か道はん。徳山云く、汝試みに天皇龍潭底を舉せよ看ん。欽山擬議す。徳山便ち打つ。欽山延壽堂に歸つて云く、是は則ち是、我を打つこと太煞し。巖頭云く、汝與麼ならば、他後徳山を見んと道ふこと莫れ。

一天皇も也た恁麼に道ふ、龍潭も也た恁麼に道ふ、未審し、徳山作麼生か道はん。徳山に代つて答へよ。

答 果然。

五、女子出定

昔、文殊、諸佛の集る處に至つて、諸佛に値ふ、各本所に還る。惟だ一女人有り、彼の佛座に近いて三昧に入る。文殊乃ち佛に白して言さく、何ぞ此の女人、佛座に近きて坐することを得て、而も我は得ざる。佛文殊に告げたまはく、汝但だ此の女人を覺して、二昧より起たしめ、汝自ら之に問へと。文殊女人を遶ること三匝し、指を鳴すこと一下し、乃ち托して梵天に至る、其の神力を盡して、而も出すこと能はず。世尊云く、假使、百千の文殊も亦此の女人の定を出すことを得ず。下方四十二億河沙の國土を過ぎて岡明菩薩有り、能く此の女人の定を出さん。須臾にして、岡明菩

薩地より湧出して佛を禮拜す。佛罔明に救して、却つて女人の前に至り、指を鳴すこと一下す。女人是に於て定より出づ。

一文殊が出さざる理由如何。

答 文殊は七佛の祖師で、根本智を得て居るから、出すの出すぬのと云ふ音沙汰は無い。

二 罔明が出した理由如何。

答 罔明は初地の菩薩であるから、十二因縁を觀じて出さねばならぬ理由があるからして出したのであります。

三 如來禪と祖祖禪との立て分け如何。

答 如來禪は此の珠數は結構であります。

祖師禪は此の珠數は菩提樹で、上に金箔を塗り、絹のふさがついてゐて結構な品であります。

四 これに語を著けよ。

答 殘星數點雁橫塞。長笛一聲人倚樓。

五 甲斐の素匡出定を頌して云く、「釋迦如來文殊罔明曳きつれてそれからそれへと深山木の萩」と、これは如何。

答 一枚見識で何の役にも立たぬ。

五、千尺井中

性空禪師僧問ふ、如何なるか是れ祖師西來意。師云く、若し人の千尺の井中に在らんに、寸繩を假らずして此の人を出し得ば、即

ち汝に西來意を答へん。僧云く、近日湖南の鴨和尚出世し、亦人の爲めに東語西話す。師即ち沙彌寂子を喚び、這の死屍を拽出し看よ。仰山耽源に舉似す、如何が井中の人を出得せん。源云く、咄、癡漢、誰れか井中に在る。仰山契はず。後に又馮山に問ふ、如何が井中の人を出得せん。山乃ち召して云く、慧寂と。寂應諾す。山云く。出了也。寂、後に仰山に住して常に前話を舉して衆に示して云く、我れ耽源の處に於て體を得、馮山に用を得たり。

一 如何が寸繩を假らずして出得せん。

答 井中に落ちて苦悶する様子を、次に水を吐き出す様子をなし、「あゝ苦しかつた、井の中と思つてゐたら、室内であ

りましたか、これは甚だ失禮致しました、ごうか御用捨を」と云ふ。又は井中に落ちて苦む様子を、上を向いて小聲にて「助けて呉れ、助けて呉れ」と云ふ。

五、夾山掘坑

夾山云く、我れ二十年此の山に住す、未だ曾て宗門中の事を舉著せずと。僧あり問ふ、承る和尚言ふ有るあり、二十年此の山に住す、未だ曾て宗門の事を舉著せずと。是なりや否や。山云く、是僧即ち禪床を掀倒す。山休し去る。明日に至つて普請して、一坑を掘つて、侍者をして、作日問話の僧を請じ來らしめ、山云く、老僧二十年只無義の話を説く、請ふ、上座をして老僧を打殺して、

坑中に埋向せしめよ。若し老僧を打殺せずんば、上座自ら打殺することを著けて此の坑中に埋まん。其の僧束装して潜かに去る。

一 其の僧に代つて拶せよ。

答 アカンペー。

癸、大龍堅固法身

僧大龍に問ふ、色身は敗壞す、如何なるか是れ堅固法身。龍云く、山花開いて錦に似たり、澗水湛へて藍の如し。

一 山花開いて錦に似たり、澗水湛へて藍の如し。

答 又手當胸して立ち「山花」と云ひ、そのまゝ坐して「澗水」と云ふ。

二 山花に拶して云く、忽ち大風に逢ふ時如何。

答 身を蹴して、花の散るが如き様子をして倒れる。

三 澗水に拶して云く、忽ち傾湫倒嶽に逢ふ時如何。

答 チン、ドン、パランと葬式の風をする。

四 世語を著けよ。

答 露をなご仇なるものと思ひけん我が身も草におかぬばかりを。又は、山寺の春の夕ぐれ来て見れば入あひの鐘に花ぞちりける。

壬、玄沙三種病人

玄沙衆に示して云く、諸方の老宿盡く道ふ、接物利生と、忽ち三

種の病人來るに遇はゞ、作麼生か接せん。患盲の者は、指鎚堅拂、他又見ず。患聾の者は、語言三昧、他又聞かず。患啞の者は、伊をして説かしむるも、又説き得ず。且く作麼生か接せん。若し此の人を接し得ずんば、佛法靈驗無からん。僧雲門に請益す。雲門云く、汝禮拜せよ著。僧禮拜して起つ。雲門拄杖を以て極く。僧退後す。門云く、汝是れ患盲に非ず。復近前來と喚ぶ。僧近前す。門云く、汝是れ患聾にあらず。門乃ち云く、還つて會すや。僧云く、不會。門云く、汝是れ患啞にあらず。僧此に於て省あり。

一 患盲の者は指鎚堅拂他又見ず。

答 目には見えませぬが奇麗な花ですな。

二 患啞の者は伊をして説かしむるも又説き得ず。

答 口には言はないと申してゐます。

三 患聾の者は語言三昧他又聞かず。

答 耳では聞きませんが、今雨の音がザアザアしてゐます。

四 語の著けよ。

答 朝見雲泛泛。夕聞水潺潺。

五、鹽官犀牛扇子

鹽官一日侍者を喚び、我が爲めに犀牛の扇子を將ち來れといふ。侍者云く、扇子破れぬ。官云く、扇子既に破れなば、我れに犀牛兒を還し來れ。侍者無對。投子云く、將ち出すことを辭せず。恐

らくは頭角全からざらんことを。雪竇拈じて云く、我れ全からざる底の頭角を要す。石霜云く、若し和尚に還へさば即ち無からん。雪竇拈じて云く、犀牛兒猶ほ在り。資福一圓相を畫し、中に於て一の牛の字を書す。雪竇拈じて云く、適來什麼としてか將ち出さざる。保福云く、和尚年尊し、別に人を請ぜば好し。雪竇拈じて云く、惜むべし勞して功無きことを。

一 我れに犀牛兒を還し來れ。

答 そんなものはへし折つて塵溜へ捨ててしまつた。

二 我れ全からざる底の頭角を要す。

答 長崎のシツチン彫を二十錢で買つて來た。

三 適來什麼としてか將ち出さざる。

答 今此處にあつたが、はや何處かへ行つたと云ひながら、あたりを見廻す。

四 勞して功無し。

答 聲を立て、泣く。

五 語を著けよ。

答 時不利兮離不逝。離不逝今可奈何。虞兮虞兮奈若何。

五、乾峯三種病

乾峯和尚上堂曰く、法身に三種の病、二種の光あり、須らく是れ一たび透過して始めて穩座の地を解す。雲門衆を出でて云く、

庵内の人甚麼としてか庵外の事を知らざる。峰呵呵大笑す。門云く、猶ほ是れ學人が疑處。峯云く、是れ什麼の心行ぞ。門云く、也た和尚の相委悉を要す。峯云く、直に須らく恁麼に穩密にして、始めて穩座地を解す。門髮く、喏喏。

一 法身に三種の病、二種の光あり、須らく是れ一たび透過して始めて穩座の地を解す。

答 フフンと笑ふ。

二 これに語を著けよ。

答 猛虎口中奪鹿。飢鷹瓜下分兔。

三 乾峯の肚をねらつて語を著けよ。

答 面上夾竹桃花。肚裡參天荆棘。

四 雲門衆を出でて云く、庵内の人甚麼としてか庵外の事を知らざる。

答 障子を開き外を眺めて、「ああ佳い庭ですこと、此方が飛石、彼方が龍燈、向ふにあるのが雪隠ですな、臭氣が來ないうち閉めませう」と云ひながらピタリと閉める。

五 これに語を著けよ。

答 舜無卓錫地。禹無十戸聚。

六 此の則は法身の調べなるを以て、法身の語を著けよ。

答 身體髮膚受之父母不敢毀傷孝之始也。

六、德山托鉢

雪峯德山の會下に在つて飯頭と作る。一日齋晚し。德山托鉢して下つて法堂に至る。峯云く、鐘未だ鳴らず、鼓未だ響かざるに這の老漢托鉢して什麼の處に向つてか去る。山無語、低頭して方丈に歸る。雪峯巖頭に舉似す。頭云く、大小の德山最後の句を會せず。山聞いて侍者をして喚んで方丈に至らしめ、問うて云く、汝老僧を肯はざるな。頭密かに其の意を啓す。山來日に至つて上堂、尋常と同じからず。頭僧堂前に於て掌を撫して、大笑して曰く、且喜すらくは此の老漢、最後の句を會することを。他後天下の人何を奈何ともせざらん。然も此の如くなりと雖、只三年の活

を得ん。果して三年にして化し去る。

一 德山方丈に歸る。

答 起ち上りて歸る様子をす。

二 語を著けよ。

答 始隨芳草去。又逐落花回。

三 頭云く、大小の德山最後の句を會せずと、雪峯に代りて巖頭に挨拶せよ。

答 馬鹿坊主、最後の句が何處にある。

四 語を著けよ。

答 一髮引千鈞。

五 巖頭密に其の意を啓す。

答 「あるぞえ、あるぞえ」と大石が吉良を討つ考へがある様子を
をする。

六 語を著けよ。

答 父爲子隱。子爲父隱。

七 巖頭大衆面前にて密かに其の意を啓す。

答 目と目で知らせる様子を
する。

八 只三年の活を得ん。

答 あなたは天眼通ですか、えらいことを知つてゐますね。
九 若し死なぬ時はどうする。

答 そんなこと云つても人の壽命は今晚も分かりませぬぞ。

一〇 最後の句と最初の句と是れ一句にあらず。

答 最後の句とか最初の句とかぬかすに打ち殺してしまふぞ。

五位

逐位頌

正中偏。

三更初夜月明前。莫恠相逢不相識。隱隱猶懷舊日嫌。偏中正。

失曉老婆逢古鏡。分明覲面別無真。休更迷頭還認影。正中來。

無中有路隔塵埃。但能不觸當今諱。也勝前朝斷舌才。兼中至。

兩刃交鋒不用避。好手猶如火裏蓮。宛然自有冲天氣。兼中到。

不隨有無誰敢和。人人盡欲出常流。折合還歸炭裏坐。

白隱の五位解釋

正偏五位。正は空なり、偏は色なり、正は黒なり、偏は白なり、陰は正なり、陽は偏なり。陰の中に陽が備り、陽の中に陰が備る、是れ回互なり、回互は入り組みさいふことなり、是れは迷悟、生佛、正偏互に入り組むなり。正偏は石頭薬山の際に於て出でたり、即ち寶鏡三昧に略記せり、曹洞之を以て宗と爲す。後見五位の圖

なり、則ち能く易の卦に通じて作るなり。是に依て見るべきなり。夫れ此の五位は老僧截徑、汝等をして見せしむと云て、扇子を舉して云く、未だ舉せざる時元と體なきなり、今舉するに當つて而も汝等之を見、而も元空なり、空なる處即ち正なり。已に舉する時は偏なり、空中に即ち空あり、是れ正中偏なり。舉する中に則ち元と空あり、是れ偏正中なり。已に舉揚する處、一切空處より出づる、故に是れ正中來なり。此の搖動の端的、明暗双々兼ね備へて不足はない、是は兼中至なり。師扇子を納めて云く、兼中到には一句半句の言ふべき無し、正は根本智なり、偏は後得智なり。師曾て正受老人より傳受すといふとあり。

正中偏は洞山悟本大師の頌に云く、「三更初夜月明前」三更は夜半にして暗き故に正なり。初夜も同うして且つ然り。月明は明なる故に偏なり。前とは暗きが中に明を含む故に正中に偏を含むなり。其の風色は月將に上らんとして未だ上らず、是れ正中偏の有様にあらずや。是は全體悟後の修行を明す話頭なれば、一度透過して八識の眞暗な處より、奥の内陣へ踏み込んだ處、それより一氣を吹き回さんとする處なり。「怪む莫れ相逢うて」こは、是れ差別の法なるが故に偏なり。「相知らず」とは得て分たぬ故に正なり。修行の本旨は諸佛にも逢ひて何かな奇特でもあらうと思ふたに、何にもない、有らば骨哉、是れぞ得た事として取り定めも無く、然

し會したは會したかと思へども、會したこともないやうな故に、相逢て相知らずと云ひたるなり。「隱々として猶ほ舊日の嫌を懷く」隱隱とは無分曉なるが故に正なり。猶ほ舊日の嫌を懷くとは偏なり。食ふたやうにもあり食はぬやうにもあり、是れを洞下に書を馳せて家に到らずといふなり。舊日の嫌とは縱令正位たりと雖も、一法立てば偏の故に舊日の嫌を懷くといふなり。洞下の唱へは迷うても許さず、悟つても許さぬ、即ち十成を諱むが故なり。

要するに、五位は宇宙の妙用を五つに分けて見たもので、正は宇宙の本體、偏は宇宙の現相で、森羅萬象さまざまの差別の事相は悉く此の偏の字を以て示してある。正は本體なるが故に空界無

物、深更の如く、其の眞夜中のやうな正の中に森々羅々たる現相はあるので、其の現相は個々別々であるが、元是れ正中より現はれたるが故に三更初夜月明前、相逢うて識らぬとはいへぬ。隱々云々は何處とはなしに昔の親しみはあるので、即ち宇宙萬象さまざまに一味平等眞如に歸結させたのであるから、現相はさまざまあるが、其の本語は一つである。

偏中正はなぜ悟後に此の位を立てたるか、成程悟つた處を定中より見れば甚だ廣く明かなるやうなれども、動用の上に出る時は、事に觸れ縁に應じて失ひ、埒あかざる故に、迷悟不常、只偏なれば、偏に偏なり、正なれば正に正なり。故に正中偏を救はんが爲

に此の偏中正を立るなり。正の一位に居れば役にたゝぬ故に是を救ふなり。天台の三觀にも此の趣きあり、只空觀の一諦ですむべき事なるに、空假中不思議の三諦は何故に立てたかといふに、空諦の一位に於て能度の佛なく、所度の衆生無し、故に眞の佛にあらずんば利益無き故に、空諦假諦今時那邊の畔の切れた處を中道第一義とは云へり。空諦は平等、假諦は差別なり。天台の中興惠信僧都評して曰く、「無差別平等は佛法に準ぜず、惡平等の故なり。天曉の老婆古鏡に逢ふとは、婆々も若い時は色々の粉黛化粧して美しくかつたが、年老ひては昔の生氣も何處へやら、寄る四海浪の老眼霞かゝり、一切何やら分らぬが正位なり。是は修行者が

大地黑漫漫の處へ踏み込んで、生佛一如と悟つた處が古鏡に逢ふなり。分明觀面更に眞無しとは、分明觀面は偏なり、更に眞無しとは正なり、差別の上に更に無相平等は無い、是が本分現成の畔が切れた處である。斯の如く成て來れば、柳は緑り花は紅、鴉は黒く鶯は白し、更に此の外に平等は無きなり。更に頭に迷ひ影を認むることを休めよ、迷ひの場、悟りの場があれば、皆な頭に迷ひ影を認むるのである。是は迷ひの畔が切れ、悟りの畔が切れて本分現成も無く、盆もなく正月も無く、佛の衆生のといふ沙汰も無く、修行熟し偏正三昧の處である。空假の二つのへり切りが無くなつた處が、則ち中道第一義諦である。

要するに、偏中正は正偏中の反對にて、天地萬物森々羅々たるを一味平等の眞如に歸結させたのであるから、現相はさまざまあるが、其の本體は一つであるといふので、正中偏は本體より現相を見、偏中正は現相より本體を見たので、見方は違ふけれども、其實同一眞理の兩方面である、即ち正中偏は一味平等の本體から差別の現相に向ふので偏中正は差別の現相から本體に向ふので、先きの眞夜中ではない、萬物ありくと見える曉方に、昔の鏡を出して見れば、美醜ありくと見える、此の外に別に眞如といふものも無ければ、眞理といふものも無い、其の儘だ、即ち此の萬象差別を離れて別に本體はないのである。夫れに眞理と云へば、何

か外にでもあるものゝやうに思ふて、闇がりに鏡を見て頭がないからとて探さやうに外の所を見てはならぬのである。即ち先きに正中偏は平等其の儘を差別と見たので、此の偏中正は差別其の儘を平等と見たので、共に平等即差別の眞理を道破したのである。以上の二つは宇宙の本體と現相との關係を示したので、曹山大師の語に、正位は空界にして本來物なし、偏位は色界にして萬象の形あり、正中偏は理に背いて事に就き、偏中正は事を捨て、理に入る、兼帶は宜しく衆縁に應じて諸有に墮せよ。染に非ず淨に非ず、偏に非ず正に非ず、故に虚玄の大道無著の眞宗といふ。従上の先德、此の一位を推して最妙最玄とす、當に詳審に辯明すべし。

君を正位となし、臣の君に向ふ、是れ偏中正。君の臣を視る、これ正中偏。君臣合道、これ兼帶の語となる。此の兼帶が宇宙の妙用である。是れを三位に分けて、先づ正中來、其の次ぎが偏中至として、夫れから兼中到となるのであるが、此の正中來と偏中至とは、共に兼中到の極致に至るの手段たるに過ぎないのである。即ち其の手段に正の方から達するのと、偏の方から達するのとあるのである。

正中來は如上の修行が熟した故に、今時那邊の畔が切れ、有爲無爲の畔が切れてある。左様見れば、他と變らぬ、故に下衆生を化せねばならぬところが正中來である。又明暗双々として、空假

の二つなく、不二門なる是れを中道の法理に契合したと認めては佛法の眞に相違である、駄目な穿議であつて利益が無い、故に之を爲人度生する、是れが正中來である。「無中に路あり塵埃を出づ」とは、四弘の誓願を以て灰頭土面に成て、淨穢に管せず衆生を化するのである。上は一塵を立せざる處、下は萬里の境に應ずるのである、臨濟和尚は途中に有て家舎を離れず、家舎に在て途中を離れずと云はれてゐる。但だ能く當今の諱に觸れずんば、正位に住せず、今時に墮せず、佛界魔界、地獄穢土淨土、一切認得せざる端的である。認得すれば即ち諱に觸る。臨濟和尚は、是を指して境と云はれた。また前朝斷舌の才勝るとある、之は古事首書に

詳に出てをる言句があるから、色々な事に逢ふのだ、けれども三昧を得る時は一切縫罅の跡無く、終日説て未だ曾て説かず、四十九年一字不説と云はれたも此の事である。是れが自受用三昧より他受用に出づるのである。

要するに正中來といふのは、正の方から行くので、吾々が宇宙萬象の平等一如の所に合點がゆけば、差別の萬法に處して自由自在を得ることが出来る。此の空界無物の正中の二つの道がある。理屈を離れ塵埃を離れてをる。只此の道に任せて理屈も議論もいらぬ。其の理屈も議論もなく天子様の御諱に觸れてはならぬが如く宇宙平等の本體其の儘に打ち任せて疑ひなければ、此の理屈も議

論もない所が雄辯滔々他をして口を開かしめぬの才にも優るのである。(斷舌の才は世間の人に物を言はせぬ雄辯で、隋の李知章のことを指したのである)

偏中至、これは元と兼中至を洞山の古塔司が偏中至と改められたが、何の益もなき事である。其の理を推せば、只正中來に對すると云ふばかりで、古塔司は洞山の唱へを能く知つた人では無いと云うてある。

要するに偏中至は、正中來とは反對に、宇宙の萬象森々羅々として差別のあるまゝに、縁に隨ひ機に應じてゆくので、味方と敵と兩刃相交へて戦ふ如く、自分の力を以て進むので、少しでも油

斷をすれば命がないのであるから、六塵五欲の煩惱の中にあつて少しも昧まされぬこと、火の中に咲いた蓮の如く自由自在なので、之を形容して、宛然自ら冲天の氣ありといふたのである。即ち正中來の方は一すぢに疑はずしてゆき、偏中至は自分の力で捌いてゆくので、先きを他力に譬ふれば此れは自力である。元來が兼中至といふので、他受用一切の諸法が兼備した處を兼中至と云ふのである。兩刃鋒を交へて避くべからずとは、正といへば偏があり、偏といへば正がある、偏正三昧を歷れば、明暗雙々の端的、兵法の名人と名人との出合ひ。指し交へ互に一寸も指手引手がならぬやうなものである。好子還て火裏の蓮に同じとは、正中偏にある修行者

は動用に於て力が弱く役に立たぬ、水中より出る蓮華の火に逢うて凋むが如く、今は兼中至を歴た人故に、動用の上に於て脱洒自在なることは、火裏の蓮の火に逢うて變ぜざるが如く、又火に入て眞の金色轉鮮かなりといふも此の事である。宛然として自ら衝天の氣あり、四弘の誓願ある故に、度生の上に於て取捨無し、是れ即ち蓋天蓋地の處である。

兼中到、有無に落ちず誰か肯て和せんで、此に至つては何事やら人の知つた事では無い。人人盡く常流を出んと欲すで、如何なる修行者も常流を出で、よきものならんとせぬ者は無い。折合して還て炭裏に歸つて坐す、段々修行して常流を出で、無上菩提に歸

して見たれば、相も變らぬ無分曉である。華嚴の四法界にかけて之を見るも亦可なり、兼中至までは未だ教内を出でず、兼中到は教外の一句である、下語すれば、到り得て歸り來れば別事無し、廬山は煙雨浙江は潮の妙致である。

要するに兼中到は、宇宙の妙用に現はれた所で、兼といふのは正偏ともに一味になつた所で、事と理との合一したのぢや。此の理事無礙なるものが、聽て事々無礙となるので、有とか無とか生とか死とかいふ一切の相對を絶した處で、誰も何ともいひやうの無い境界で、去るべき煩惱も無ければ、欣ふべき菩提もないのである。

如上五件の細詳は、古今未曾有の教示であつて、修行者は時々諦解して、此を心に得て、此を手に應ずる時は、四智三身期せずして圓成することである。釋尊曰ひ給はく、菩薩は目に佛性を見らる。大慧禪師曰く、眼に見て初めて得べし云云と。

一 正位と偏位とを易の封の上で分けて見よ。

答 一が正、二が偏であります。

二 一と二との下へ眞俗正偏等を書き分けて見よ。

答 一 正、眞、黒、暗、理、空、陰、向去。

二 偏、俗、白、明、事、色、陽、却來。

三 室内に出て來た上で正位と偏位とを分けよ。

答 火鉢あり、机あり、柱は豎に敷居は横にと見るが偏位、自己へ取つて返すと手許に何も無い、無一物と見るのが正位であります。

四 吾々が生れ出てより死するまでに、五位中の何れの一位を主とすべきか。

答 正中來。

五 五位を四智と三身とに配せよ。

答 大圓鏡智—正中偏—法身

平等性智 $\left\langle \begin{array}{l} \text{偏中正} \\ \text{正中來} \end{array} \right\rangle$ 報身

妙觀察智—兼中至 $\left\langle \begin{array}{l} \\ \text{應身} \end{array} \right\rangle$
成所作智—兼中到

六 妙覺果滿の上から五位を四智と三身とに配せよ。

答 大圓鏡智—兼中到 $\left\langle \begin{array}{l} \\ \text{法身} \end{array} \right\rangle$
成所作智—正中偏

平等性智 $\left\langle \begin{array}{l} \text{偏中正} \\ \text{正中來} \end{array} \right\rangle$ 報身

妙觀察智—兼中至—應身

七 正偏回互の端的は什麼ぢや。

答 起て三步前に進み、三步後に退く。

八 五位の窠窟は什麼して離るるか。

五位

答 得たら捨て、得たら捨て、皆打捨ててしまひます。

九 五位を離れて一句を云へ。

答 お早う、お暑う。

一〇 五位の穿鑿中如何に呈解するも退けられたらば什麼するか。

答 バツト禪床を蹴飛ばします。

二 悟後の一大事とは什麼ぢや。

答 合掌して四弘誓願文を誦出する。

十重禁

一、快意殺生戒

一 此の煙草盆を何う見たら持ち何う見たら犯すか。

答 徹底煙草盆と見れば持ち空と見れば犯す。

二 現に煙草盆があるのを何處をにらんで空と見るのぢや。

答 自己に取つて返すと手許に何もものもないから、向ふに物が立たぬ。

三 何の爲に犯し何の爲に持つか。

答 上求菩提の爲に犯し、下化衆生の爲に持ちます。

四 上求菩提下化衆生と云ふが菩提に種子あり、衆生に種子ありや。

答 一點無縁の大悲を以て下化衆生の種子とし、四弘誓願輪に鞭つが上求菩提の種子である。

五 時に依つて殺活を自在にせねばならぬが何を以て殺し何を以て活すか。

答 殺人刀を以て殺し、活人劍を以て活す。

六 殺に向つて前語を著けよ。

答 殺人刀。

七 活に向つて前語を著けよ。

答 活人劍。

八 殺活に本語を著けよ。

答 劍爲不平離寶匣。藥因療病出金瓶。

二、劫盜人物戒

一 此の煙草盆を什麼見たら持ち什麼見たら犯すか。

答 煙草盆と自己とピッタリ一枚見れば持ち、自己と別と見れば犯す。

二 今日事上に於て煙草盆と自己と只一枚にはかり成り切つて居ては不自由ではないか。

答 客が来れば、先づ一服召し上れと差出す、その場くで自己とピツタリと一つに使ひます。

三 不偷盜戒を犯すは如何なる時か。

答 あの煙草盆は好い、欲いものぢやと一點汚れが生ずれば大偷盜であります。

四 執著の念を起せば犯戒となるか。

答 少しにても執著の念起れば犯戒の第一です。

五 然らば空と見る時は什麼ぢや。

答 空に盜まれる。

六 前語を著けよ。

答 一有多種、二無兩般。

七 本語を著けよ。

答 衆花盡處松千尺。群鳥喧時鶴一聲。

三、無慈行欲戒

一 此の煙草盆を何う見たら持ち、何う見たら犯すか。

答 唯單に煙草盆と見た切りなれば持つ、けれども好い煙草盆ぢやとか、悪い煙草盆ぢやとか、好いとか、悪いとか、第二念に涉り、執者の念生ずれば犯す。

二 今日事上では什麼ぢや。

答 煙草盆に向へば一服吹ひ、茶碗に向へば一杯飲む、甘味ければ甘味い、不味ければ不味い、一寸の執著もない、鏡に物の映るが如く、此處を隨縁即宗といひ、持戒の親しきところである。

三 男女に對した上で持犯を什麼分つか。

答 妍ならば徹底妍の一枚、醜ならば徹底醜の一枚、内外一物も無きが故にヒタリと一枚になる。胡來れば胡現じ、漢來れば漢現するこれが持て、若し美醜に依つて第二念を相續れば犯となる。

四 度生邊になれば犯さねばならぬことなるが何の爲か。

答 機根の大小を試す爲に第二念を續くるのであります。

五 前語を著けよ。

答 三千寵愛在一人。

六 本語を著けよ。

答 美如西施離金闕、嬌似楊妃倚玉樓。

四、故心妄語戒

一 此の煙草盆を何と喚べば持ち、何と喚べば犯すか。

答 喚んで煙草盆となす時は持ち、喚んで富士山となす時は犯す。

二 趙州は西來意を問へば栢樹子と答へ、雲門は佛を問へば乾屎
橛と答へた、今老僧は煙草盆を喚んで富士山と云ふ、是れ持
か犯か。

答 持。

三 何が故ぞ持なる。

答 西來意を問へば栢樹子と答へねばならぬとか、佛を問へば
乾屎橛と答へねばならぬとか、思慮分別に涉れば犯すが、
これに涉らずして答ふるが故に持つ。

四 此處に東西一條の道あり何れに向つて行けば極樂、何れに向
つて行けば地獄なりやと問ふとき、如何に答ふれば犯すか。

答 右に行けば東京、左に行けば京都。

五 佛祖は妄語し、衆生は實語す、何の爲の妄語何の爲の實語か

答 祖佛を成ぜんが爲め妄語し、衆生を成せんが爲め實語す。

六 妄語と實語との隔り如何。

答 一枚の舌で妄語と實語とを使ひ分ける。

七 前語を著けよ。

答 一句定乾坤。

八 本語を著けよ。

答 非先王之法言不敢言、非先王之德行不敢行。

五、酤酒生罪戒

一 此の煙草盆を何う見たら持ち、何う見たら犯すか。

答 只煙草盆と見れば持つが、これに就いてどうしようとして執著すればこれに醉殺さるので犯す。

二 明眼の人何に因つて往々破戒するか。

答 初發心時の三昧力が弱い爲め所謂般若の智が欠乏するからである。

三 今此の世界に醉者幾人醒者幾人あるか。

答 醉者三萬三千三百三十三人、醒者三萬三千三百三十三人あ

ります。

四 その醉は何時醒めるか。

答 成正覺の時に醒める。

五 前語を著けよ。

答 寒則向火、熱則乘涼。

六 本語を著けよ。

答 雁無遺蹤之意。水無沈影之心。

六、談他過失戒

一 持犯を什麼分つか。

答 自他對待する時、盡天盡地只他の一個と見れば持、若し毫釐も自己を立すれば犯。

二 前語を著けよ。

答 一般風光畫不成。

三 本語を著けよ。

答 雲在嶺頭閑不徹。水流澗下大忙生。

七、自讚毀他戒

一 如何が持す。

答 自他對待する時盡乾坤我一人と見れば持、毫釐も他を立す

れば犯。

二 談他過失と此の戒とは正反對にて持犯を分つ理由如何。

答 彼は他をして光明を放たしめ、此れは自をして光明を現せしむるものだから。

三 前語を著けよ。

答 宇宙無雙日。乾坤只一人。

四 本語を著けよ。

答 紫金光聚照山河。天上人間意氣多。

八、慳生毀辱戒

一 持犯を什麼分ける。

答 惜しい欲しい、憎い可愛の心が一寸でも起れば犯、一寸も起らぬのが持。

二 然らば平等と差別の上で持犯を分けて見よ。

答 平等即ち五蘊皆空と見れば持、諸法差別に涉れば犯。

三 前語を著けよ。

答 心身脱落。脱落心身。

四 本語を著けよ。

答 薰天富貴。徹骨貧窮。

九、瞋不受謝戒

一 いま目前に於て鬼か蛇かが現れた時どう見れば持、どう見れば犯か。

答 鬼が出たら鬼と、蛇が出たら蛇と、何物が出て来るも、それとヒタリと一つになれば持、別々と見れば犯。

二 前語を著けよ。

答 鑊湯無冷處。

三 本語を著けよ。

答 一念瞋恚頭戴角。這中何納是兼非。